



物部氏の古墳

ISONOKAMI-TOYODA Tumulus Group & BESSHOU Tumulus Group
Mononobe Clan's Tombs

石上・豊田古墳群と別所古墳群

別所古墳群



2023

編集・発行
天理市教育委員会



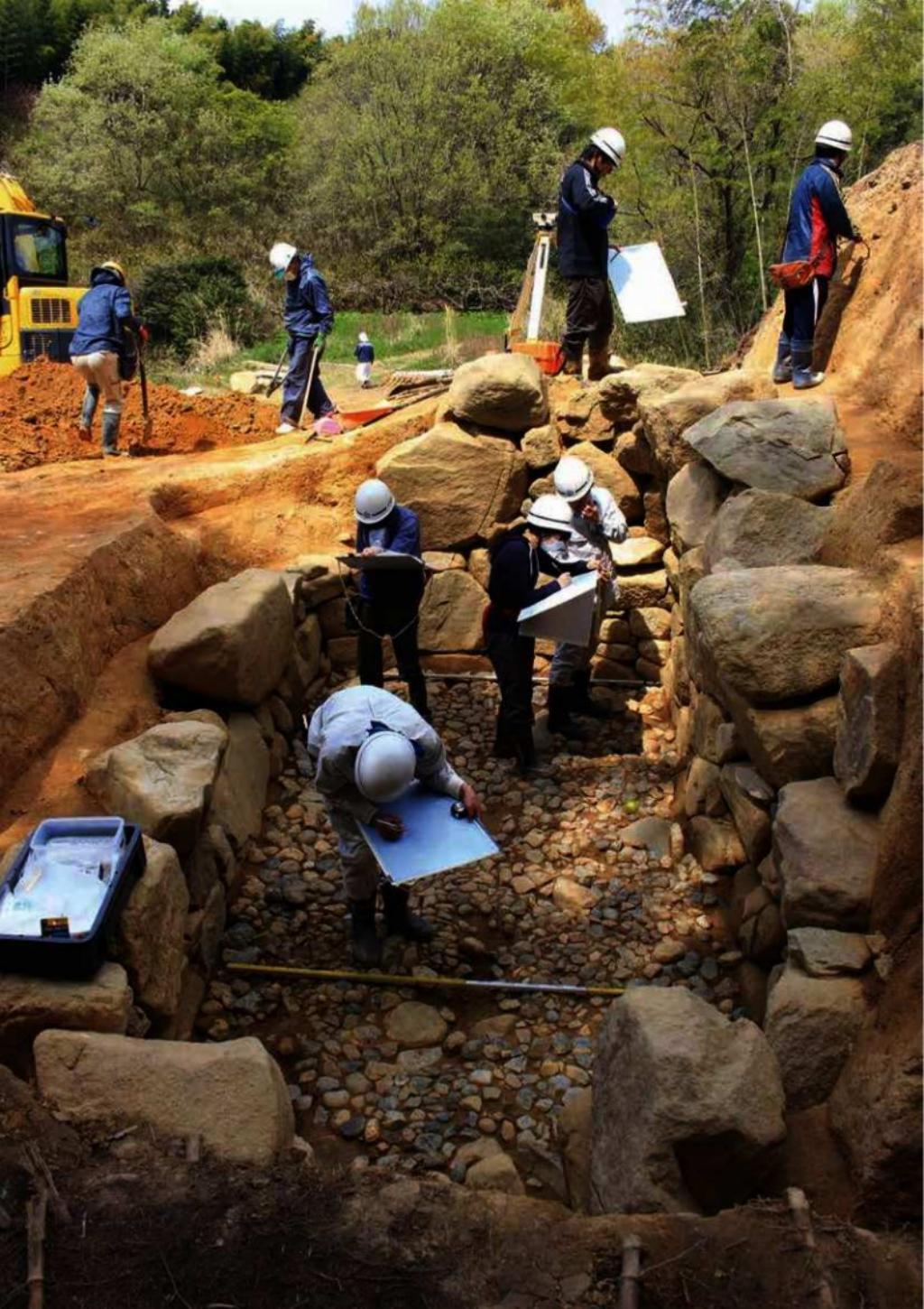
物部氏の古墳

石上・豊田古墳群と別所古墳群

ISONOKAMI-TOYODA & BESSHŌ Tumulus Group : Mononobe Clan's Tombs

2023

編集・発行
天理市教育委員会



(例　言)

- 本書はなら歴史芸術文化村・天理市教育委員会が共催する地域展「物部氏の古墳 石上・豊田古墳群と別所古墳群」にあわせて作成した解説書である。
- 本書は令和3（2021）年に刊行した『物部氏の古墳 乾之内古墳群』（天理大学附属天理参考館・天理市教育委員会編）の続編に相当する。
- 本書作成にあたり下記機関・個人の協力を賜った。
大谷大学博物館
天理大学附属天理参考館
奈良県立橿原考古学研究所
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
埋蔵文化財天理教調査団
由良大和古代文化研究協会
青柳泰介 池田保信 泉森政 鶴見泰寿 藤原郁代 宮崎健司
- 本書は天理市教育委員会が編集・発行した。執筆・編集は石田大輔（天理市教育委員会文化財課）が担当した。
- 本書に掲載した古墳の多くは民有地等にあり、立ち入りには許可が必要となる場合がある。

■地域展「物部氏の古墳 石上・豊田古墳群と別所古墳群」

- 会期 令和5（2023）年1月7日（土）～2月12日（日）
□会場 なら歴史芸術文化村文化財修復・展示棟B1階展示室（天理市仙之内町）
□主催 なら歴史芸術文化村・天理市教育委員会
□協力 大谷大学博物館
天理大学附属天理参考館
奈良県立橿原考古学研究所
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
埋蔵文化財天理教調査団

◆ 本地域展は下記の列島展と同会場にて同時開催

■「発掘された日本列島 2022 調査研究最前線」

- 主催 文化庁・なら歴史芸術文化村・奈良新聞社・全国新聞社事業協議会

(表紙写真)

- 豊田孤塚古墳 副葬品 所蔵：天理市教育委員会
- 別所羅子冢古墳 円筒埴輪 所蔵：天理市教育委員会
- ホリノヲ2号墳 鎔治工具 提供：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- ハミ塚古墳 横穴式石室 提供：奈良県立橿原考古学研究所
- 豊田孤塚古墳 旋回式獸像鏡 所蔵：天理市教育委員会
- 平尾山1号墳 副葬品 所蔵：天理市教育委員会
- 豊田トンド山古墳 横穴式石室 撮影：天理市教育委員会
- 豊田孤塚古墳 横穴式石室 撮影：天理市教育委員会
- 豊田孤塚古墳 金銅装杏葉 所蔵：天理市教育委員会
- ホリノヲ4号墳 双口鏡 提供：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 空から見た別所大塚古墳 撮影：天理市教育委員会
- ホリノヲ2号墳 玉類 提供：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- ウナリ塚古墳 横穴式石室 撮影：天理市教育委員会
- 豊田孤塚古墳 遺物出土状況 撮影：天理市教育委員会
- 豊田トンド山古墳 副葬品 所蔵：天理市教育委員会
- 袋塚古墳 円筒埴輪出土状況 撮影：天理市教育委員会

(表紙写真の配図)

| | | | |
|----|----|----|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| | | | |
| 5 | 6 | 7 | |
| | | 9 | |
| 8 | | | 12 |
| | 10 | 11 | |
| | | | 13 |
| 14 | 15 | 16 | |

[解説]

豊田トンド山古墳の発掘調査 撮影：天理市教育委員会

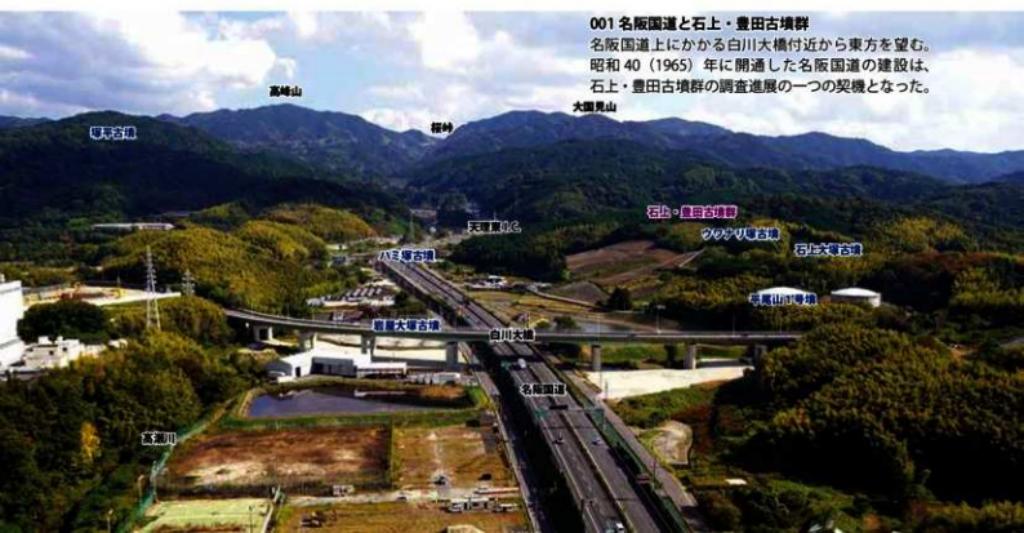
豊田孤塚古墳の発掘調査 撮影：天理市教育委員会

[裏表紙写真]

豊田トンド山古墳の現地説明会 撮影：天理市教育委員会

目 次

| | | | |
|------------------------|----|---|----|
| I 布留遺跡北方の古墳群 | 1 | ○天理砂岩 ○平尾山遺跡の四面庇付建物 ○西ノ森支群 ○豊田狐塚古墳 ○「狐塚」の伝承 ○塚平古墳 ○十三塚古墳群 | 37 |
| 布留遺跡と周辺の古墳群 | 2 | | 38 |
| 石上・豊田古墳群と別所古墳群 | 6 | | 40 |
| | | | 40 |
| II 石上・豊田古墳群の首長墳 | 11 | | 42 |
| 岩屋大塚古墳 | 12 | | 42 |
| 石上大塚古墳 | 13 | | 43 |
| ウワナリ塚古墳 | 14 | | 47 |
| 「大塚東方一古墳」の金銅製飾履 | 17 | | 48 |
| ハミ塚古墳 | 18 | | 48 |
| 豊田トンド山古墳 | 22 | | |
| 山城に改造された豊田トンド山古墳 | 27 | | |
| 布留遺跡周辺の大型横穴式石室 | 28 | | |
| 石上・豊田古墳群と別所古墳群 調査研究の歩み | 28 | | |
| | | | |
| III 石上・豊田古墳群の中小古墳 | 29 | IV 別所古墳群 | 49 |
| アミダヒラ支群 | 30 | 塚山古墳 | 50 |
| 石上北支群 | 31 | ダンゴ塚古墳 | 50 |
| 石峯北・石峯南支群 | 32 | 別所鐘子塚古墳 | 51 |
| ホリノヲ支群 | 33 | 袋塚古墳 | 52 |
| タキハラ支群 | 36 | 別所大塚古墳 | 54 |
| | | 「大和丹波市町北部の古墳に就いて」 | 55 |
| | | 石川支群 | 56 |
| | | 古墳群由来とされる遺物 | 57 |
| | | 参考文献・出典 | 58 |



I 布留遺跡北方の古墳群

奈良県天理市の中心市街地の地下に眠る布留遺跡は、古墳時代には儀礼・政治・生産といった様々な機能を兼ねそなえる奈良盆地内有数の集落であった。この布留遺跡に拠点を置いた可能性が高いと考えられているのが、古代史上の有力氏族「物部氏」である。

布留遺跡を取り巻く東西2km、南北3kmほどの空間には、南に「^{すきのうち}」^{いそのみや}「^{さとう}」^{くわい}古墳群、北に石上・豊田古墳群と別所古墳群が広がっている。布留遺跡北方の石上・豊田古墳群と別所古墳群はあわせて270基以上もの古墳を擁する一大群集墳であり、6世紀代を中心に大型前方後円墳や中小規模の円墳が多数築かれた。南方の「^{すきのうち}」^{いそのみや}古墳群とともに、布留遺跡に拠点を置いた地域勢力の墓域と考えられている。

令和3（2021）年に刊行した『物部氏の古墳「^{すきのうち}」^{いそのみや}古墳群』につづき、今回は石上・豊田古墳群と別所古墳群の検討を通じて、王権の中枢で権勢を誇った「物部氏」の実像を探ることとしたい。





003 石上・豊田古墳群と別所古墳群の位置

大和川水系布留川の流域に位置する布留遺跡と石上・豊田古墳群、別所古墳群。

ふるいせき 布留遺跡と周辺の古墳群

天理市の中心市街地は奈良盆地東縁の山裾、大和高原から盆地内に流下する布留川が形成した扇状地上に広がっている。この市街地の下には、東西2km、南北1.5kmにわたって広がる布留遺跡が存在する。

布留遺跡と石上神宮

布留遺跡は旧石器時代から現代に至るまで各時代の遺構・遺物が検出される大規模な複合遺跡だが、特に古墳時代中期～後期（5～6世紀）には、儀礼・政治・生産といった様々な機能を兼ねそなえた奈良盆地内有数の集落へと成長する。

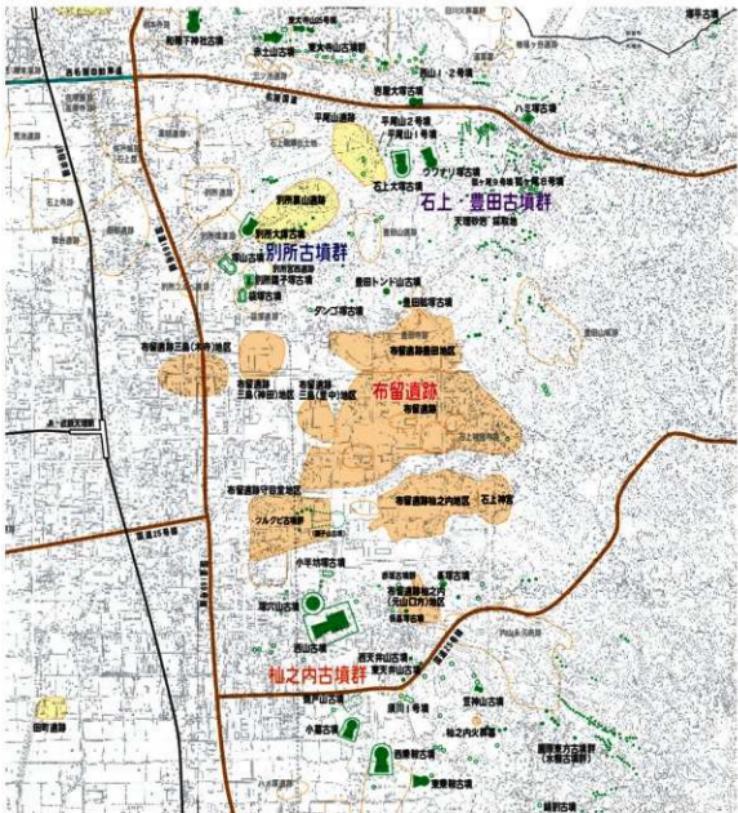
この布留遺跡を見下ろす高台に、古代史上重要な石上神宮が位置する。この神社はもともとヤマト王権が奉斎し、王権の管理する宝物を神庫に納めていたと考えられているが、遅くとも6世紀代には有力氏族である「物部氏」が祭祀や神宝を管掌していたことが分かっている。

このように石上神宮と深い関わりを有する「物部氏」が拠点を置いた可能性が高いと考えられているのが、石上神宮の眼下に広がる布留遺跡である。



004 布留遺跡周辺の地形

大和高原から流下する布留川が形成した扇状地上に布留遺跡が立地し、その周辺を古墳群が取り巻いている。石上・豊田古墳群と別所古墳群は布留遺跡の北側。



005 布留遺跡周辺の古墳群・遺跡

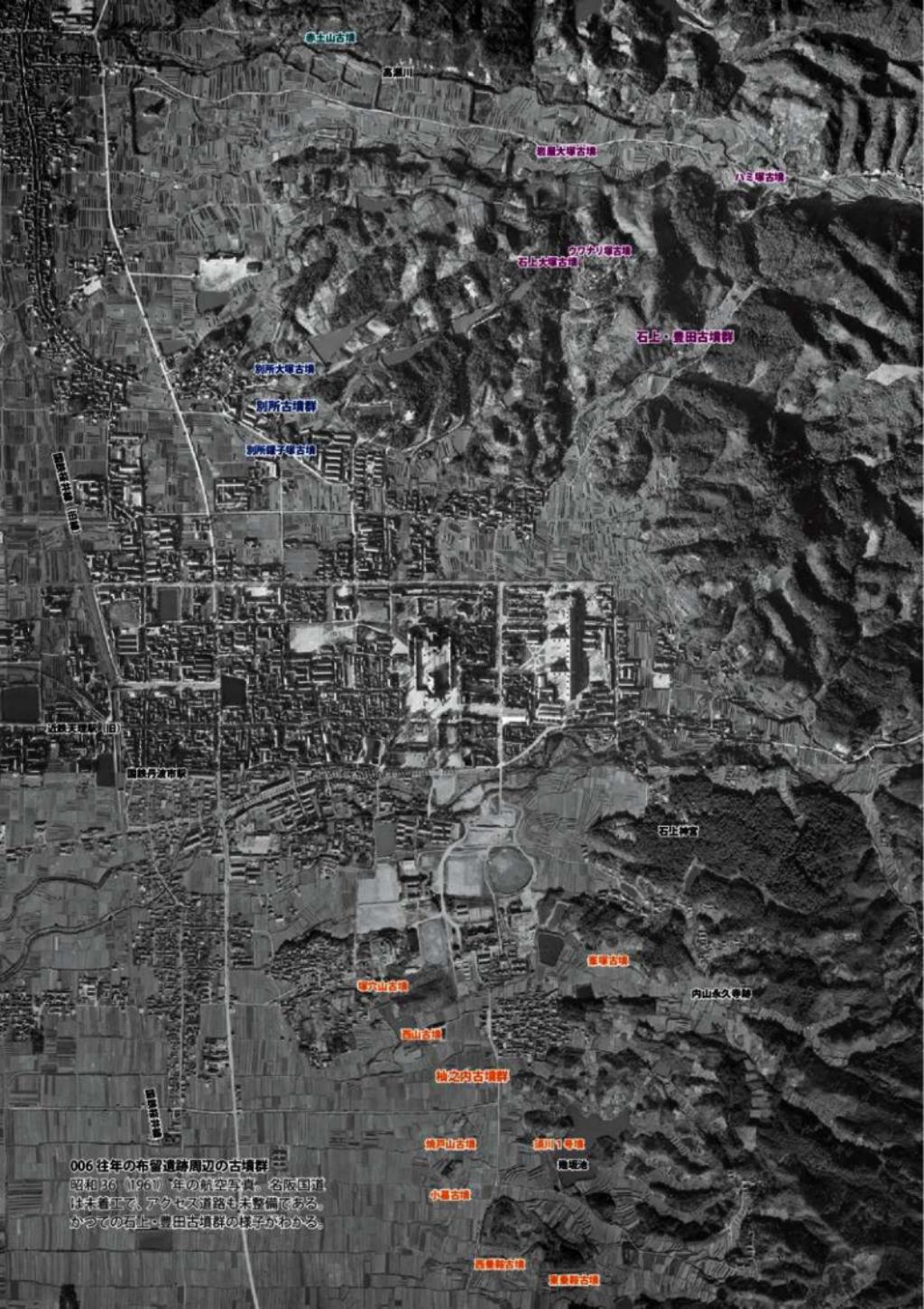
拠点化する布留遺跡と周辺の古墳群

布留遺跡では5～6世紀になると武器や玉・鍛冶の工房が出現し、ものづくりの一拠点となる。ウマの飼養が始まるのもこのころである。また、大規模な溝の掘削や整地行為、大型掘立柱建物の建設、特殊な円筒埴輪を樹立した祭場の出現など儀礼・政治の舞台が整えられ、ありふれた集落から傑出した集落へと変貌を遂げる。

このように拠点化した布留遺跡周辺には3つの古墳群が成立した。南方の段丘上に広がる柴之内古墳群は、日本列島最大の前方後方墳である西山古墳が4世紀に築かれたのち、とくに5世紀後半から6世紀前半にかけて、西乘鞍古墳をはじめとする100m級の大型前方後円墳や小規模円墳が約80基築かれた。

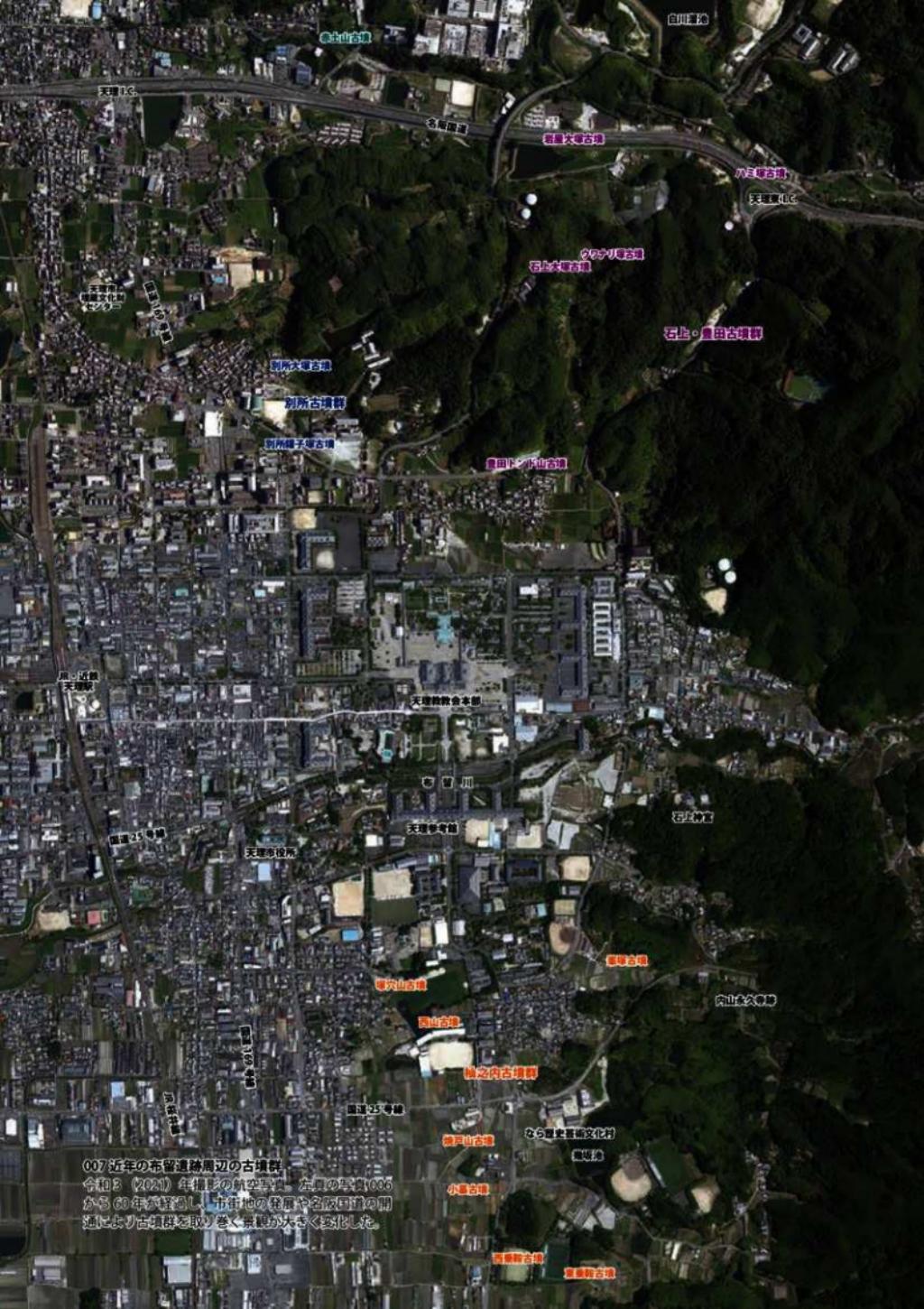
一方、布留遺跡北方の丘陵麓・丘陵上では、5世紀に石上・豊田古墳群と別所古墳群でそれぞれ古墳築造が始まり、別所古墳群では6世紀前半にかけて、石上・豊田古墳群では6世紀後半から7世紀前半を中心に、100m級の大型前方後円墳や多数の中小規模の円墳が築かれた。その総数は約270基に及ぶ。この当時100m級の大型前方後円墳を築くことができたのは、王権中枢にごく近い一部の首長層に限られる。

5世紀から6世紀にかけて王権中枢で権勢をほしいままにした「物部氏」。令和3(2021)年に刊行した『物部氏の古墳 柴之内古墳群』に引き続いて、今回は石上・豊田古墳群と別所古墳群における数々の発掘調査成果の紹介を通じて、古墳群を築いた「物部氏」の実像を探ることにする。



006 往年の布留遺跡周辺の古墳群

昭和36(1961)年の航空写真。名阪国道は未着工で、アクセス道路も未整備であるかつての石上・豊田古墳群の様子がわかる。



007 近年の布留遺跡周辺の古墳群

今和3（2021）年撮影の航空写真。左頁の写真1006
から60年が経過し、市街地の発展や名阪国道の開
通により古墳群を取り巻く景観が大きく変化した。

鳥山古墳

白川遺跡

天理 I.C.

名阪高速

岩屋大塚古墳

八三塚古墳

天理駅

ウタリ塚古墳

石上大塚古墳

石上・豊田古墳群

別所大塚古墳

別所古墳群

別所幡子塚古墳

豊田町・小山古墳

天理教教会本部

天理参考館

石上

国道25号

天理市役所

高塚古墳

内山山古墳

等穴山古墳

岡山古墳

樋之内古墳群

猪戸山古墳

なら市立古墳文化村

小森古墳

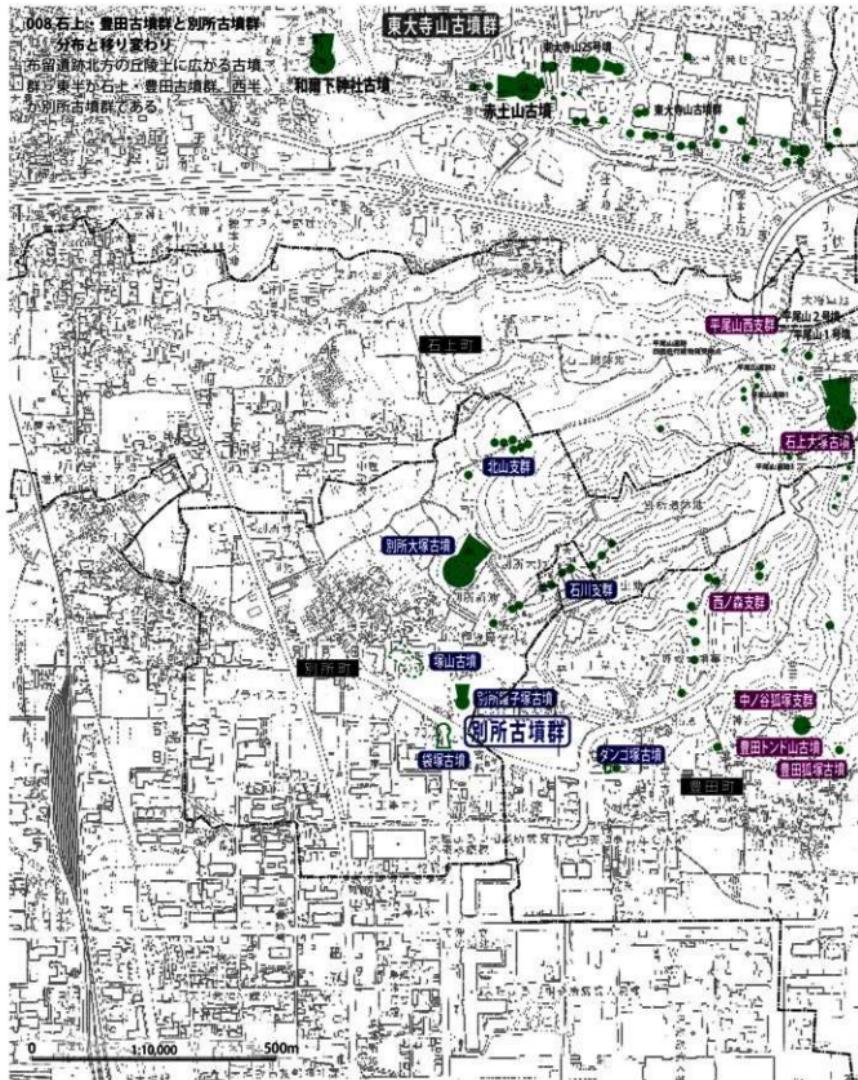
西垂新古墳

春瀬野古墳

いそのかみ とよだ べっしょ
石上・豊田古墳群と別所古墳群

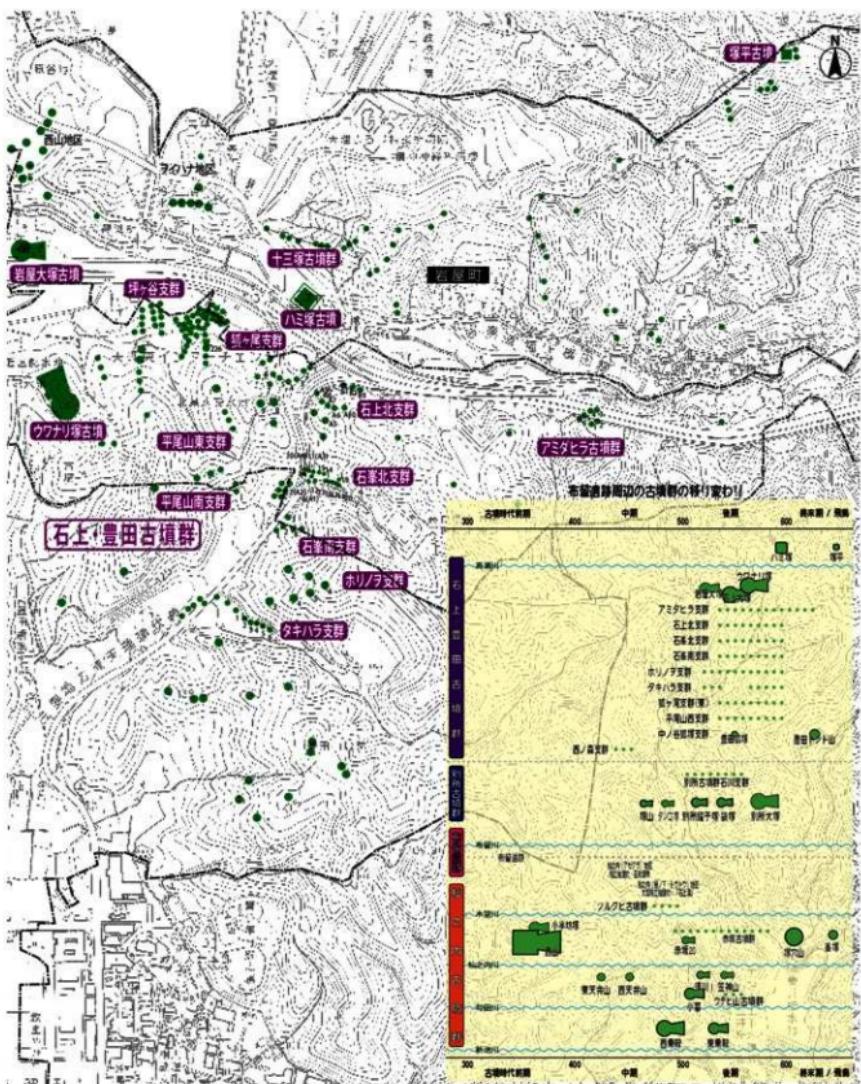
布留遺跡北方の丘陵麓・丘陵上に広がり、総数 270 基以上を数える石上・豊田古墳群と別所古墳群。研究史上では両者を区別せず全体を石上・豊田古墳群と呼ぶことが多いが、本書ではそれぞれ区別して取り上げることにした。

石上・豊田古墳群は現在の天理市石上町・豊田町・岩屋町に広がる群集墳で、総数は 250 基以上を数える。別所大塚古墳を中心とする**別所古墳群**は、現在の別所町と豊田町の一部に分布し、総数は約 20 基である。



5世紀以降に拠点化した布留遺跡とは至近距離にある二つの古墳群だが、古墳群の築造が始まった5世紀代では、布留の集落を望む丘陵南麓がとくに造営地に選ばれた。石上・豊田古墳群では西ノ森支群、別所古墳群では塚山古墳がそれにあたる。集落に近い別所古墳群は6世紀前半にかけて造営が本格化した。

石上・豊田古墳群でも6世紀前葉には古墳の造営地が東に拡大し、6世紀中葉～後葉には丘陵全体、さらには布留の集落から丘陵を隔てた岩屋谷一帯にまで古墳の分布が広がっていく。布留の人々は大型前方後円墳や群集墳の造営に適した地を求めて、次第に墓域を集落の近くから丘陵上に拡張していったらしい。

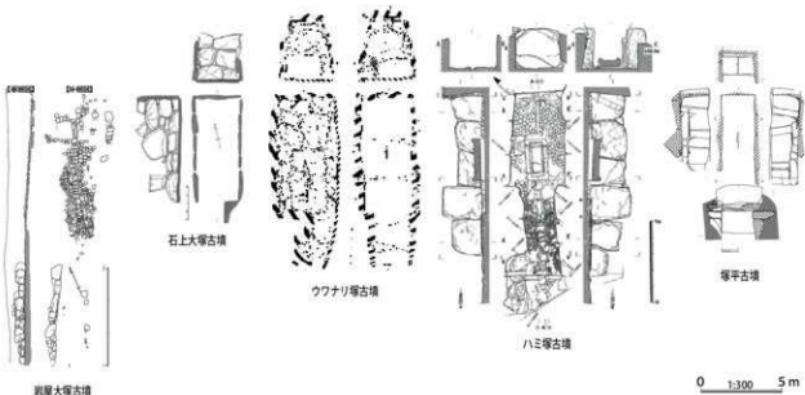


009 石上・豊田古墳群と周辺の横穴式石室

石上・豊田古墳群周辺で発掘調査された横穴式石室はおよそ50基以上。ひとくちに横穴式石室といっても、玄室長が6m超の巨大石室から2m前後の小さな石室まで千差万別である。

杣之内古墳群や石上・豊田古墳群の大型前方後円墳・方墳・円墳は、いずれも玄室長5mクラス以上の規模の横穴式石室を有しており、墳丘・石室とも首長層の古墳にふさわしい大きさであると言える。

石上・豊田古墳群 前方後円墳・方墳の横穴式石室



岩屋大塚古墳

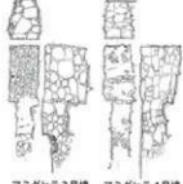
0 1:300 5m

アミダヒラ支群



アミダヒラ1号墳

アミダヒラ2号墳



アミダヒラ3号墳

アミダヒラ4号墳

アミダヒラ5号墳

アミダヒラ6号墳

石上北支群



石上北 A5 号墳

石上北 A8 号墳



石上北 A7 号墳

石上北 A8 号墳

石峯北支群



石峯5号墳

石峯4号墳

石峯6号墳



石峯A1(石峯6)号墳

石峯A2(石峯7)号墳

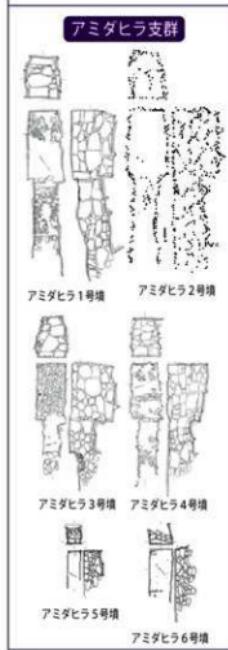
石峯南支群



石峯1号墳

石峯2号墳

石峯3号墳

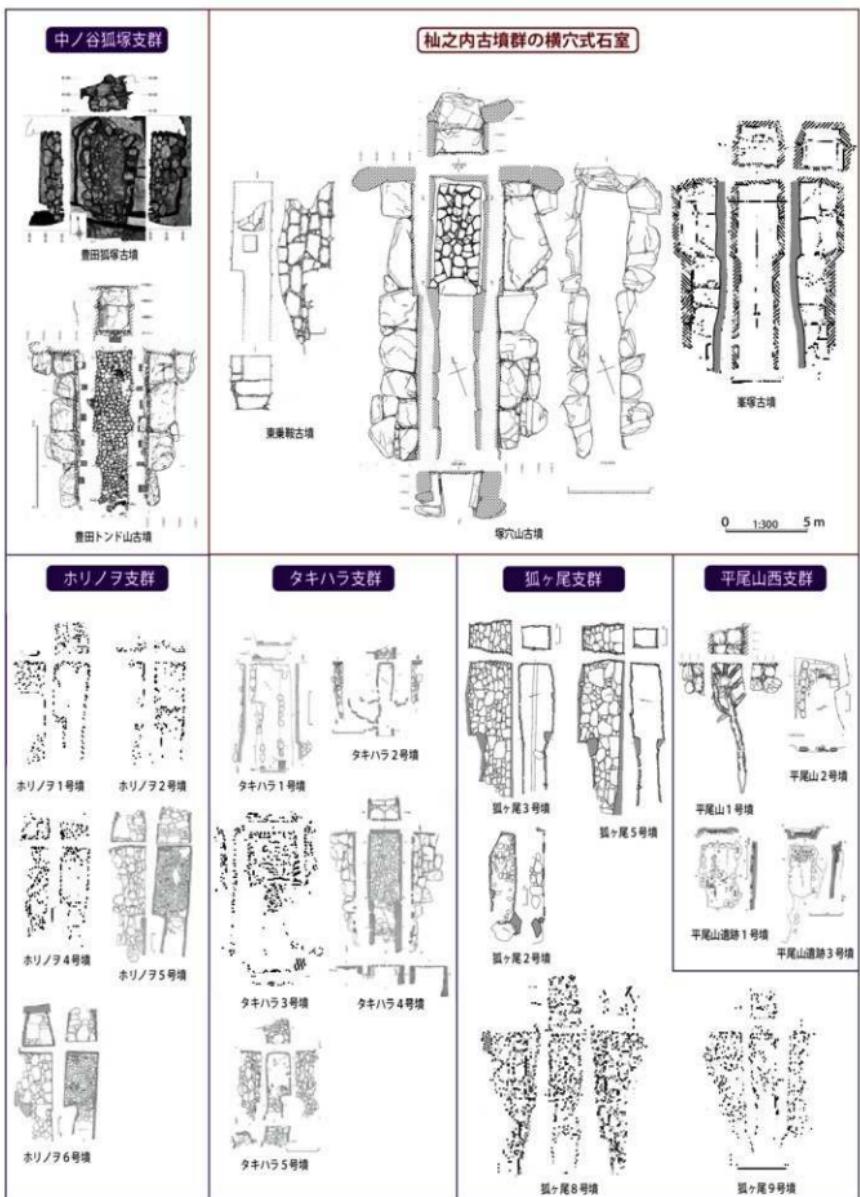


石峯A3号墳

石峯A4号墳

中小規模の円墳の横穴式石室はどうだろうか。石上北支群や石峯北支群では玄室長2~3m台前半までだが、狐ヶ尾支群やホリノヲ支群では3~4m台であり、相対的に石室が大きい。こうした石室規模の大小は墳丘規模の大小とも相関がある。

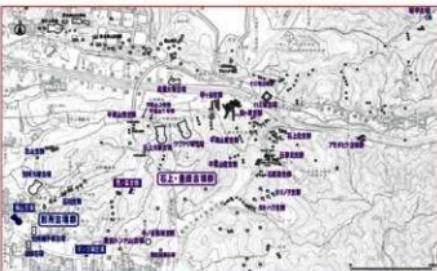
このように中小規模の円墳からなる支群同士にも規模の格差が生じており、被葬者の地位や経済力を反映している可能性がある。石上・豊田古墳群に葬られた人々が、様々な出自・階層・系譜を背景としていたことがうかがえる。



010 石上・豊田古墳群と別所古墳群 5世紀

石上・豊田古墳群では5世紀前半に西ノ森支群で円墳2基が造営。主体部は粘土椁と推定されている。後に分布の中心となる地区からはやや離れており、古墳群の先駆けとなるものである。当該時期の古墳は全体でも少数に留まる。

別所古墳群では5世紀後半に塚山古墳・ダンゴ塚古墳が築かれる。

**011 石上・豊田古墳群と別所古墳群 6世紀前葉**

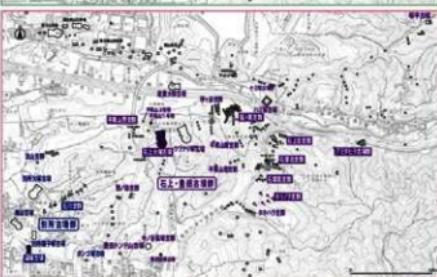
石上・豊田古墳群の中心域で造墓が始まる。ホリノヲ・タキハラの各支群で造営が開始されるが、他の支群では確認できず。この時期でも分布の広がりは限定的。ホリノヲ3号墳は主体部を木棺直葬とするが、タキハラ5号墳は片袖式横穴式石室。横穴式石室導入時期を示す。

別所古墳群では別所鍾子塚古墳が築かれる。主体部を木棺直葬とする石川支群の造営開始もこのころである。

**012 石上・豊田古墳群と別所古墳群 6世紀中葉**

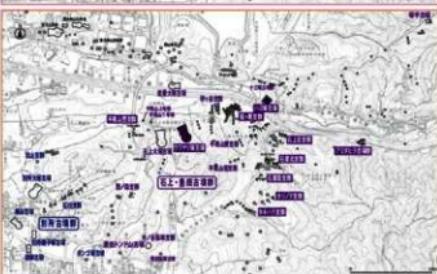
石上・豊田古墳群では大型前方後円墳の石上大塚古墳が築かれるとともに、アミダヒラ・石上北・石峯北・石峯南・狐ヶ尾・平尾山西・中ノ谷孤塚の各支群で造営が開始され、古墳群全体で造墓活動が本格化する。本古墳群を特徴づける遺物である铁滓の副葬が本格化するのもこの時期。

別所古墳群では袋塚古墳が築かれる。石川支群の造営も継続している。

**013 石上・豊田古墳群と別所古墳群 6世紀後葉**

石上・豊田古墳群では大型前方後円墳であるウワナリ塚古墳・大型方墳であるハミ塚古墳が築かれる。各支群での造営は中葉に引き続いて活発であり、アミダヒラ・狐ヶ尾・石峯北・石峯南といった支群では造墓活動が最盛期を迎えるが、この時期を最後に造墓活動が途絶える支群も多い。

別所古墳群の様相は不明確である。別所大塚古墳の造営時期が課題となる。

**014 石上・豊田古墳群と別所古墳群 7世紀**

7世紀前半になると石上・豊田古墳群ではアミダヒラ支群で造墓が見られるが、もやは低調である。ただ、一部の支群では既存の石室を再利用（追葬）する例が見受けられる。中ノ谷孤塚支群では豊田トンド山古墳が出現する。7世紀後半には岩屋谷北方の尾根上に方墳の塚平古墳が築かれる。

別所古墳群は既に造営を停止している。



石上・豊田古墳群の首長墳

特定の地域勢力を代表する「しゅうちょう」のために築かれた古墳を「しゅうちょうふ」と呼んでいる。古墳群全体のなかで各時期ごとに最も傑出した規模・内容の古墳がその候補となる。歴代の首長墳の変遷をたどることは、首長が統率・支配した地域勢力の動向を探るうえで有力な手がかりとなる。

しょりゅう 布留遺跡を拠点とした地域勢力の存在を背景に、布留遺跡周辺には首長墳と目される大型の前方後円墳が造営される。南方の仙之内古墳群では5世紀末から6世紀前半にかけて、にしのりくら 西乗鞍古墳・あさか 小墓古墳・ひがしのりくら 東乗鞍古墳が築かれていいく。

6世紀中葉以降になると、布留遺跡北方の石上・豊田古墳群や別所古墳群に全長100mを超える石上大塚古墳・ウワナリ塚古墳・別所大塚古墳が出現する。6世紀末に前方後円墳造営が停止されたのちも、布留遺跡周辺では石上・豊田古墳群のハミ塚古墳や豊田トンド山古墳、仙之内古墳群の塚穴山古墳や峯塚古墳といった大型方墳・円墳の造営が続く。

布留遺跡周辺に相次いで築かれた首長墳は、規模が大きい点、途切れることなく造営されている点で、他地域を圧倒している。こうした首長墳のありがたは、布留遺跡の地域勢力が王権のなかできわめて重要な地位にあったことを如実に物語っている。

015 豊田トンド山古墳の発掘調査

天理市教育委員会の発掘調査で新たに発見された横穴式石室。布留遺跡を見下ろす高所に単独で築かれた豊田トンド山古墳も首長墳の一つである可能性が高い。



いわやおおつか 岩屋大塚古墳

岩屋谷のほぼ中央に位置する古墳で、前方部を東に向ける前方後円墳であると考えられている。形状は開墾などによりかなり改変されているうえ、墳丘の南半は名阪国道の建設によって失われた。墳丘は現状では全長約76mである。本来は約84m程度の全長であったとする復元案が提示されている。

昭和39(1964)年に奈良県立橿原考古学研究所による発掘調査がおこなわれた。後円部中央の盗掘坑の底から大型石室の床面敷石が見つかり、後円部墳丘斜面では葺石が確認された。また、前方部では南北方向の横穴式石室の痕跡が確認された。石室の石材はほとんど失われていたが、羨道側壁の一部が残存していたほか、玄室床面の敷石と排水溝が確認された。本来は全長16.8mにおよぶ巨大な横穴式石室であった可能性がある。石室床面からは凝灰岩製の板石が出土しており、組合式石棺の一部と考えられている。

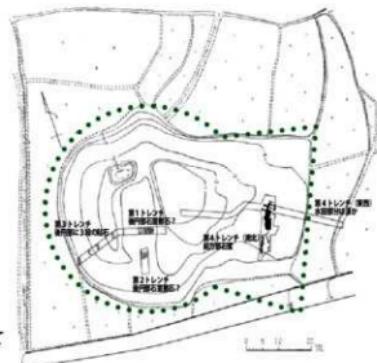
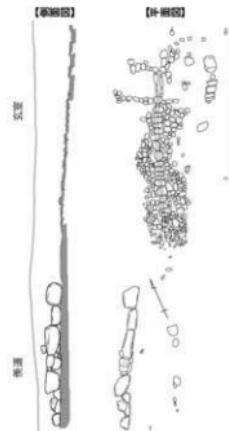
017 岩屋大塚古墳 墳丘測量図

後円部と前方部にそれぞれ横穴式石室を有していたらしい。墳丘の復元線は小栗明彦氏の案。



016 岩屋大塚古墳 遠景

発掘調査前の岩屋大塚古墳を南東から撮影したと思われる写真。古墳の南半分は名阪国道建設により失われた。

020 岩屋大塚古墳 石棺材
凝灰岩製石棺の一部。021 岩屋大塚古墳 須恵器
子持台口縁部に付いていたらしい縫。019 岩屋大塚古墳 前方部石室実測図
羨道は側壁が基底部分のみ残る。羨道幅が1.5m。玄室は奥壁・側壁とも失われていたが、床面敷石と排水溝が残る。

いそのかみおおつか 石上大塚古墳

石上町に所在する前方後円墳で、岩屋谷に面する丘陵上に、ウワナリ塚古墳と並ぶように築かれている。

全長約 107 m、後円部径約 67 m、墳丘は上下 2 段築成である（測量図は次頁 027）。とくに前方部の周囲には周濠と外堤が明瞭に残っていて、前方部の北東隅付近は陸橋のような地形になっている。また、西側には明瞭な造り出しが残っている。

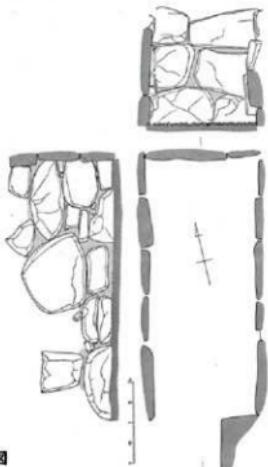
昭和 34（1959）年には奈良県立橿原考古学研究所により墳丘上で短期間の発掘調査が実施された。この調査では前方部前面の上段斜面で葺石が確認された。一方で発掘調査では埴輪は見つかっておらず、もともと埴輪を有していないかった可能性も考えられる。

埋葬施設は後円部に南向きに開口した横穴式石室である。玄室の長さ約 6.3 m、奥壁幅 2.8 m の大規模な片袖式石室で、羨道まで含めた本来の全長は 10 m 近くあつたらしい。天井石は完全に失われている。壁の石材も上部はすでなく、底から 3 ~ 4 段分程度のみ残存している。石室床面には拳大の礫が敷き詰められていたほか、細片となった凝灰岩製石棺材が出土しており、もともと石棺を有する古墳であった可能性が高い。



022 石上大塚古墳 前方部前面の葺石

前方部北側斜面に設けた調査区では、上段斜面の下部にのみ葺石が認められた。



023 石上大塚古墳
横穴式石室実測図



024 石上大塚古墳 横穴式石室

墳丘調査時の写真。石室壁面の石材はほぼ垂直に積み上げられている。



025 石上大塚古墳 横穴式石室の奥壁

奥壁は高さ約 2.8 m が残存していた。本来の天井までの高さは 3 m を超えていたものとみられる。

ウワナリ塚古墳

石上町に所在する前方後円墳で、八分山古墳と表記されたこともある。石上大塚古墳の東側に隣接しており、ほぼ同じ大きさの前方後円墳が平行に並ぶように築かれていることになる。

前方部を北に向ける上下2段築成の前方後円墳で、全長約110m、西側くびれ部には造り出しがある。前方部西北端に方形の張り出しがあるほか、前方部の前面にも基壇状の平坦面があり、この部分まで含めると長さは約128mになる。現在では前方部は果樹園として利用されている。

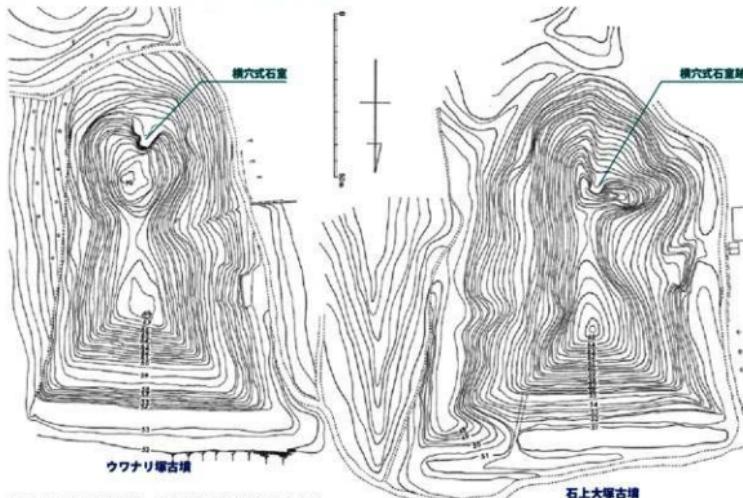


墳丘にはかつて円筒埴輪列が存在したと報告されており(p.55)、実際に円筒埴輪片が採集されたことがある。葺石は確認されていない。

埋葬施設は両袖式の横穴式石室で、現在も後円部の南側に開口している。花崗岩の巨石を積み上げており、平滑な面を石室内に向けるよう意識して積まれている。玄室は長さ約6.8m、幅2.9~3.1m、高さ3.6mの巨大なものである。羨道は現況で長さ3.5m程度あるが、多くの石材がすでに持ち去られており、現在は羨道の途中で開口している状態である。もとは長さ9m以上の羨道であったと考えられている。

石室の床面には拳大の石がみられるほか、凝灰岩製の石棺の破片も見つかっている。石室内の発掘調査は実施されておらず、出土遺物も知られていない。

026 空から見たウワナリ塚古墳・石上大塚古墳
昭和45(1970)年撮影の航空写真。ウワナリ塚古墳の前方部はすでに果樹園に変化している。後円部は木々に覆われている。



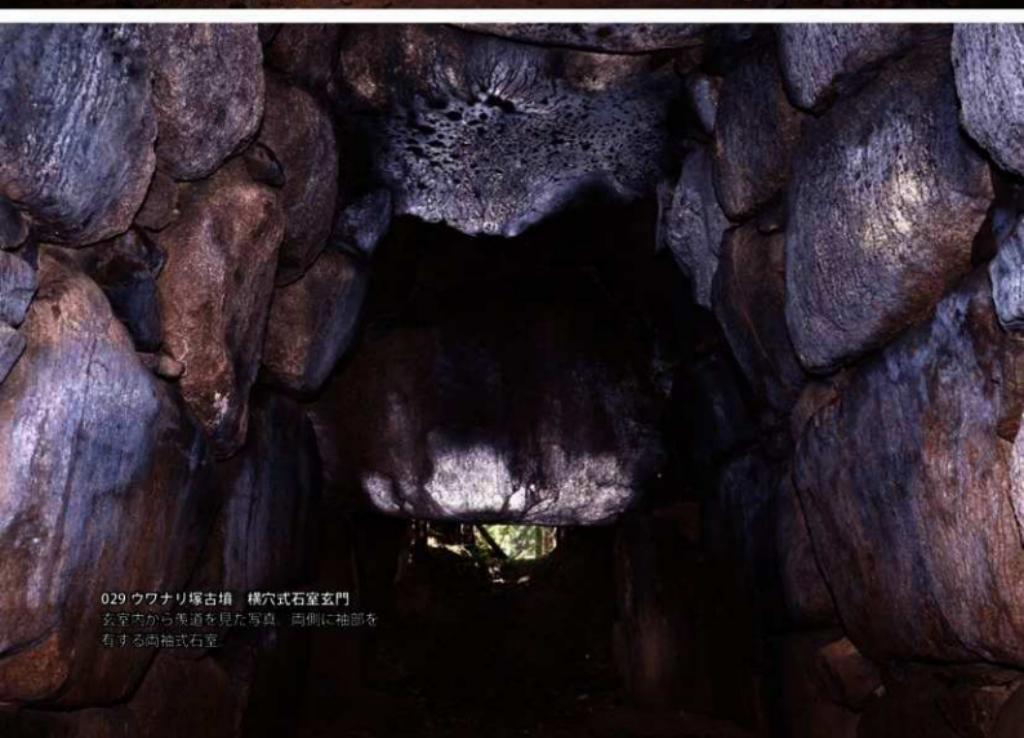
027 ウワナリ塚古墳・石上大塚古墳 墳丘測量図
100mを超える2基の前方後円墳が並ぶ。石上大塚古墳が先行して築かれた可能性が高い。

◆ ウワナリ塚古墳の横穴式石室は通常非公開



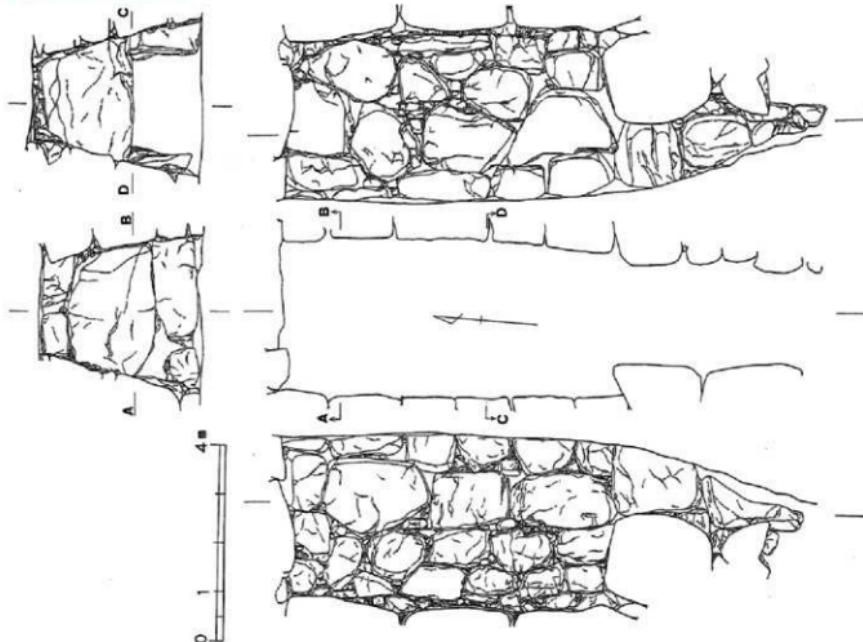
028 ウワナリ塚古墳 横穴式石室玄室

東壁は3段、南壁は4段積みで、天井には多枚の巨石を架けている。側壁は石室内側へ大きく傾斜するよう持ち送られている。



029 ウワナリ塚古墳 横穴式石室玄門

玄室内から羨道を見た写真。両側に袖部を有する両袖式石室。



030 ウワナリ塚古墳 横穴式石室実測図
古川毅氏作成の横穴式石室図面。東側壁（図上）は石材の大きさにばらつきがあるのに比べると、西側壁（図下）は各段で大きさがそろっており目地も通っている。



031 ウワナリ塚古墳 横穴式石室模型
石室の西半分を再現した模型。袖部の石材は一石
で天井石を支えている。



032 ウワナリ塚古墳 墓丘上で採集された埴輪
墳丘上に埴輪片が散布している。梅原末治氏は円筒埴輪列が存在することを報告していた（p.55）。

おおつかとうりょういちごん　こんどうせいしょくり
「大塚東方一古墳」の金銅製飾履

唐古・鍵遺跡、石舞台古墳、橿原遺跡など奈良県内の著名な発掘調査を数多く手掛け、橿原考古学研究所の初代所長を務めた末永雅雄（1897-1991）は、昭和17～19（1942～44）年に大谷大学文学部で嘱託教授として勤務していた。当時の寄贈資料と思われる考古資料群が、末永雅雄コレクションとして京都の大谷大学博物館に現在も所蔵されている。

同コレクション内には金銅製飾履が1点あることが知られている。詳細な来歴は明らかでないが、この資料とともに保管されていたカードには、「大和丹波市付近 大塚東方一古墳」「金銅装飾残欠」「骨盤二鋪著セルモノ」と墨書きされていた。

この資料は破損した飾履の一部で、現在でも骨のような有機質に金銅板が張りついた状態で保管されている。表面には連続する亀甲繁文が施されており、

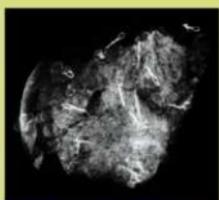
円形の歩搖で飾っている。6世紀後半の特徴を示す資料である。

古墳時代の金銅製飾履は日本列島全体で20例程度が知られているのみで、大型前方後円墳や豊富な副葬品を有する古墳から出土する例が多い。入手できた人物はごく限られた有力者層に限られる。

資料カードに記された旧丹波市町（現在の天理市の一部）域内で「大塚」と呼ばれた古墳を探すと、岩屋大塚古墳・石上大塚古墳・別所大塚古墳が挙げられる。「大塚東方一古墳」がどの古墳のことなのか明らかにすることは叶わないが、いずれにせよ石上・豊田古墳群や別所古墳群内から出土したものであつた可能性が高く、興味深い資料といえよう。



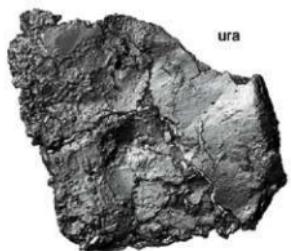
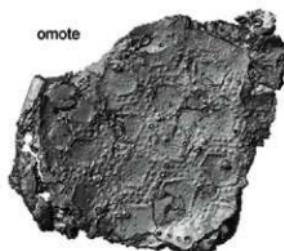
033 大谷大学博物館蔵金銅製飾履 外観
 現在は破損しており、縦・横とも10cm
 程度の大きさが残存する。



034 金銅製飾履 X線画像
 円形の歩搖が残存している
 ことがわかる。



036 【参考】藤ノ木古墳の金銅製飾履
 斑鳩町藤ノ木古墳から出土した金銅製
 飾履の復元品。



0 10 20 30 40 50mm

035 金銅製飾履 陰影画像
 形状を3次元スキャンして
 陰影表現したもの。表面に
 六角形の亀甲繁文が施され
 ている様子がわかる。

ハミ塚古墳

岩屋町に所在する方墳である。墳丘の規模は諸案あるが、発掘調査報告書は東西約 46.7 m、南北推定 44.1 m とする。緩やかな傾斜地に南辺を除く周濠をコの字に掘削し、墳丘を盛土により築造している。墳丘裾には外護列石を巡らしていたらしい。

奈良県立橿原考古学研究所が平成 7 (1995) 年から実施した発掘調査で埋葬施設の様相が明らかになった。埋葬施設は南より西 40 度方向に開口した両袖式の横穴式石室で、巨大な花崗岩の切石で作られている。発掘調査時点では壁の一段目の石材のみが残り、天井石は全て運び出されていた。現存する石室の長さは約 12 m で、玄室の長さは 5.7 m、奥壁幅 2.9 m である。

床面には石室主軸に沿って排水溝があり、その上に平らな床石を敷いていた。さらに、白石と黒石の玉砂利を厚さ約 5 ~ 10 cm 敷き、その上に内面に多量の赤色顔料（ベンガラ）を塗った凝灰岩製の剥拔式家形石棺を置いていた。石棺直下の玉砂利に破碎された須恵器片が点在しており、石棺を据える前に須恵器の破片を撒いていたらしい。家形石棺は棺蓋の長さ 270 cm、幅 138 cm で、棺蓋の長辺に 3 対の縄掛突起がつく形態であったと想定されている。



037 空から見たハミ塚古墳

横穴式石室の発掘調査時の航空写真。墳丘の南側は名阪国道の側道を建設する工事の際に大きく削り取られたという。墳丘の北側には地形の高まりがあり、天理市教育委員会が平成 27 (2015) 年に実施した試掘調査で、周濠外堤の一部である可能性があることがわかった。

出土遺物のうち須恵器・土師器はすべて細片化しており、玄室に石棺が安置される以前に破碎・散布されたものである。金属製品としては振じり環・刀装具・両頭金具（弓金具）・馬具（吊金具・雲珠）・鉄滓などが出土しているが、盗掘により多くの副葬品が失われたものと考えられる。



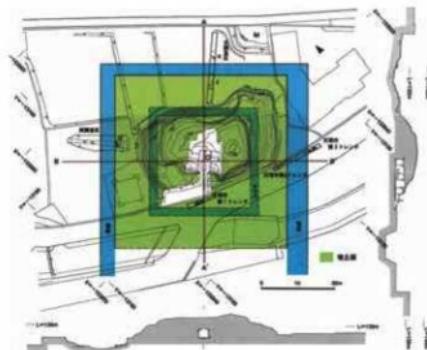
038 南から見たハミ塚古墳

ハミ塚古墳は岩屋谷を流れる高瀬川の北岸に築かれている。ハミ塚古墳や岩屋大塚古墳が所在する岩屋町は近世は山辺郡に属していた。

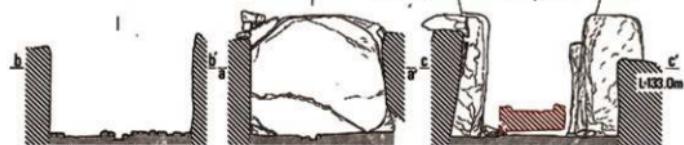


039 ハミ塚古墳 横穴式石室

手前か甬道、奥が玄室。天井石はすべて失われ、側壁も基底石のみが残っていた。

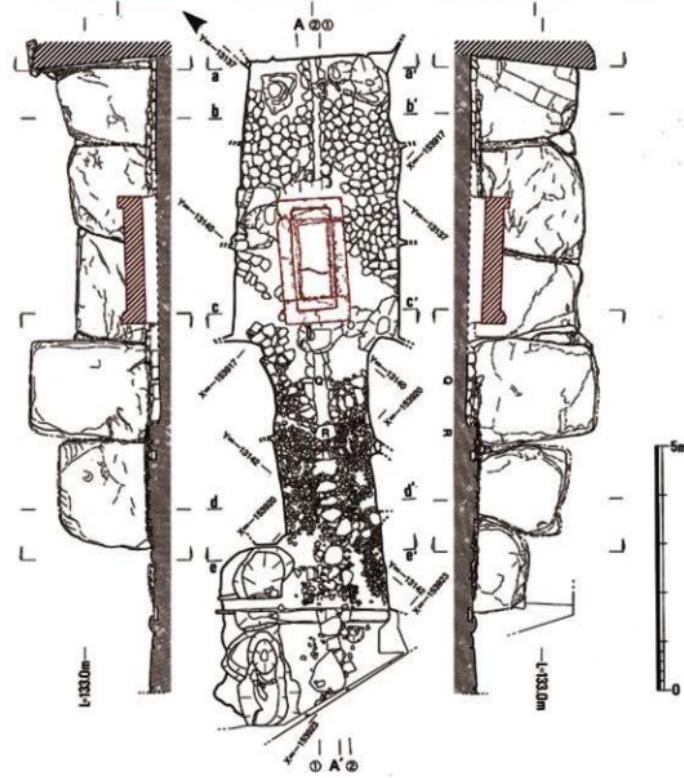


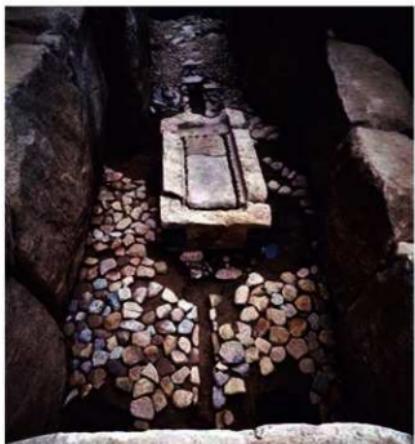
040 ハミ塚古墳 墓丘復元図
発掘調査報告書の復元図。コの字形に周濠が巡る。墓丘は上下2段築成に復元されている。



041 ハミ塚古墳 横穴式石室実測図

奥壁・側壁とも石材は一段目のみ残されている。奥壁の石材は玄室床面の玉砂利面から約2.3mの高さがあり、上位にもさらに石材があったはずである。墳丘調査の成果から、失われた天井石までの高さは約4.9mあつたと想定されている。





042 ハミ塚古墳 奥室から見た横穴式石室玄室

石室主軸に沿って排水溝が設けられ、その上に床石が敷かれている。中央にあるのは家形石棺の棺身で、盗掘者が楔により打ち削った痕跡があるが、石室外には運び出されずに残されていた。



043 ハミ塚古墳 玄室床面の玉砂利

床石の上位には白石・黒石による玉砂利が厚さ約5~10cm敷かれていた。石室全体では12万個以上の玉砂利が使用されたと推定されている。玉砂利には赤色顔料（ベンガラ）が付着していた。



044 ハミ塚古墳 金属製品

金銅装の金属製品。写真右上の筒状の金具は刀装具の一部（鰐目金具）と考えられる。写真右下の銀錠捩じ理環は大刀の装飾。



045 ハミ塚古墳 破碎された須恵器

石室内から出土した須恵器には完形をとどめるものではなく、意図的に破碎されて石室内に撒かれたと考えられている。須恵器の時期は6世紀末頃。

とよだ 豊田トンド山古墳

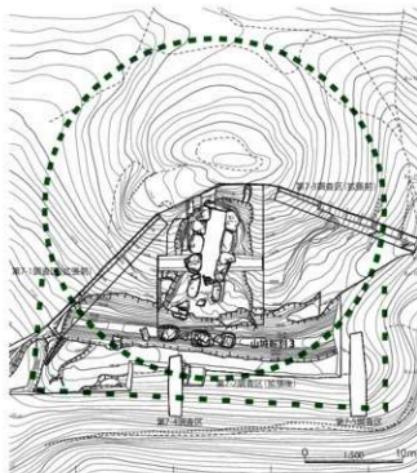
布留遺跡を見下ろす丘陵頂上部の南斜面に築かれている。後世の山城の築城により地形が改変されているが、墳丘は直径 35 m 程度の円墳となる。

横穴式石室は天井石と側壁の一部の石材が失われていた。石室は両袖式で全長約 9.4 m。玄室は奥壁の幅約 2.0 m、側壁の長さ約 4.9 m、羨道は玄門の幅約 1.7 m、側壁の長さが約 4.5 m ある。最大で一辺の長さ約 3 m に及ぶ巨石を積み上げて壁面を構成し、床面には長径 30 cm 程度の床石を敷き詰めていた。

石室内は盗掘を受けていたが、玄室内を中心に細かく破碎された二上山の凝灰岩が多数出土しており、凝灰岩製の石棺が安置されていたようだ。また、羨道床面にはベンガラにより赤く変色した部分があり、付近から鉄釘が多数出土していることから、羨道部に木棺が追葬されていた可能性が考えられる。石室内からは須恵器・土師器のほか鐵鏡・大刀の一部などの副葬品が出土した。須恵器等の特徴から古墳の築造時期は 7 世紀中葉と推定される。

047 南西から見た豊田トンド山古墳

山頂部に巨石を運び込んで築かれた横穴式石室。
後方一帯には石上・豊田古墳群が広がっている。

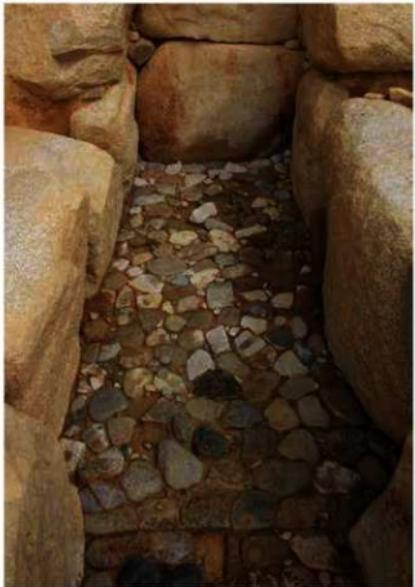


046 豊田トンド山古墳 墳丘測量図

丘陵の南斜面を切り開いて墓域を形成した「山寄せの古墳」。墳頂は標高 114.5 m。墳丘は直径 35 m 程度の円墳で、南面に方形の突出部を有する。中世山城の堀削により石室前面が破壊されている。

048 豊田トンド山古墳横穴式石室
道路建設事業に伴う発掘調査で新たに
発見された未知の横穴式石室。





049 豊田トンド山古墳 横穴式石室玄室

石室内は徹底的に盗掘されており、もともと存在した凝灰岩製石棺は破碎されて細片になっていた。



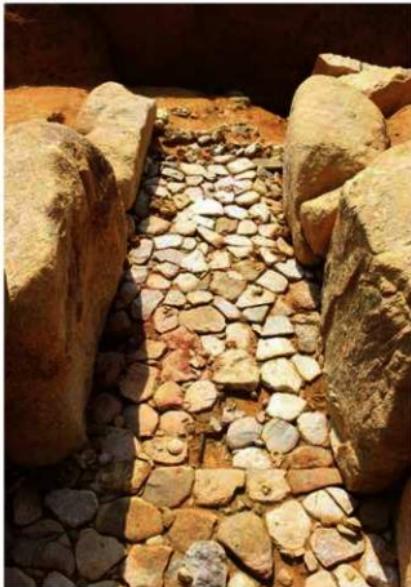
051 豊田トンド山古墳 横穴式石室玄室の遺物出土状況

写真奥の壁際では鉄鍤が束になって出土した。



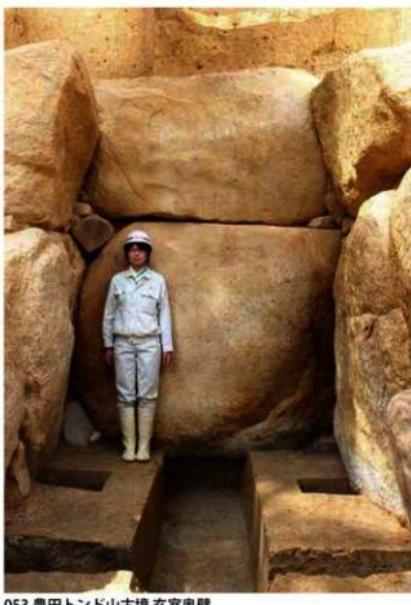
052 豊田トンド山古墳 玄門付近の石列

石列を境として玄室床面（奥）より羨道床面（手前）が一段低い。



050 豊田トンド山古墳 横穴式石室羨道

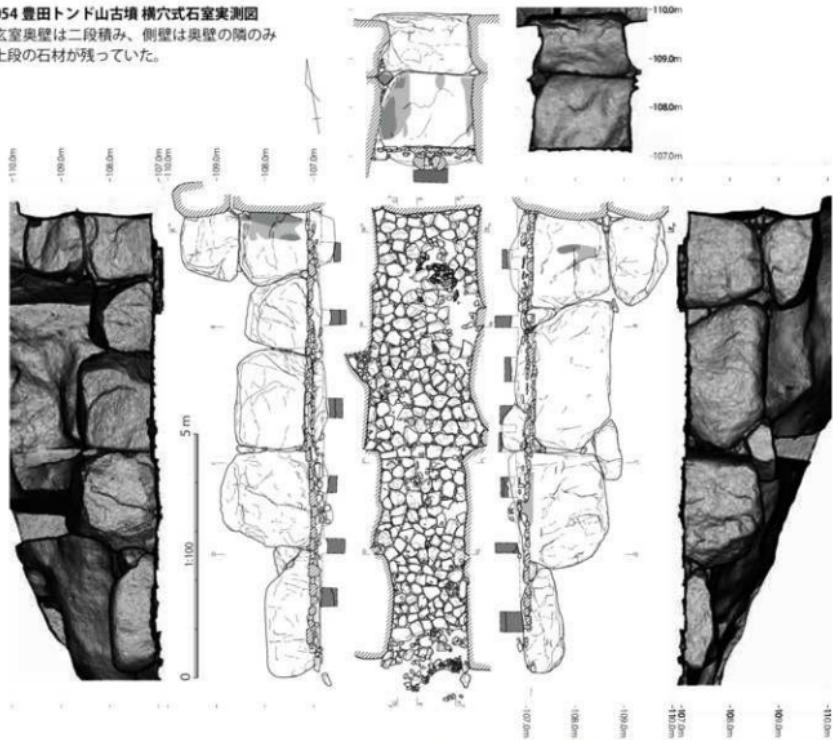
玄室から羨道を見た写真。羨道の東側（写真右側）では床面にベンガラが付着し、鉄釘や棺金具が出土した。



053 豊田トンド山古墳 玄室奥壁

床面石材撤去後の写真。玄室奥壁・側壁とも巨石の二段積み。

054 豊田トンド山古墳 横穴式石室実測図
玄室奥壁は二段積み。側壁は奥壁の隣のみ
上段の石材が残っていた。



055 横穴式石室の排水施設(上位)
床石を取り除くと排水施設が姿を
表した。中央を貫ぐ本線から側壁
に向かって支線が伸びる。



056 横穴式石室の排水施設(下位)
排水施設の下位は溝を掘って石を
両側に並べた構造。



II 石上・豊田古墳群の首長墳



057 豊田トンド山古墳 石室内の凝灰岩出土状況
石室内から出土した凝灰岩の区域ごとの重量。
凝灰岩製石棺は徹底的に破碎され石室全体に散らばっていたが、玄室内から重量にして7割以上が出土しており、本来は凝灰岩製石棺が玄室内にあったことをうかがわせる。



058 豊田トンド山古墳 破碎された石棺材

石室内からは凝灰岩（流紋岩質火山礫凝灰岩）の破片が合計で300kg以上出土した。破碎された石棺材とみられる。一部の破片は端部が面取りされている。



059 豊田トンド山古墳 棺金具

羨道からは棺金具（環座金具）や鉄釘など木棺に使用されたとみられる鐵製品が出土した。玄室には石棺、羨道には木棺を安置していた可能性が考えられる。



060 豊田トンド山古墳 出土遺物集合写真

石棺材・須恵器のほか、刀装具・鉄錐・鉄釘等が出土した。石室内から出土した須恵器は7世紀中葉頃の特徴を示している。

ヤマジム 山城に改造された豊田トンド山古墳

豊田トンド山古墳の発掘調査では、横穴式石室の前面を横切るように掘られた大規模な後世の堀割が見つかった。この堀割の底には、もともと横穴式石室を構成していたと思われる大型の石材が複数転落していた。このほかにも、丘陵頂上部一帯に堀割や土塁が複数つくられていることが判明し、そこに墳丘そのものを主郭に改造した山城が存在したことがわかった。

今回の調査地の東方約0.8kmの地点には豊田城（豊田山城）が存在することが知られている。また、その周辺では15～16世紀に布留郷一帯を根拠とした豊田氏に関連すると思われる居館の遺構も見つかっている。豊田トンド山古墳の調査で発見された山城（豊田トンド山城）は、豊田城（豊田山城）の出城のような機能を有していたかもしれない。



061 豊田トンド山城
横穴式石室前面を横切る堀割
堀割内には横穴式石室を構成していた石材が転落している



062 豊田トンド山城
堀割底に転落した石材
堀割は幅約3m、深さ約2.2m程度の規模。



063 豊田トンド山城の範囲

東西約130mの範囲に遺構が広がる。丘陵の最高所にある古墳を主郭として利用している。

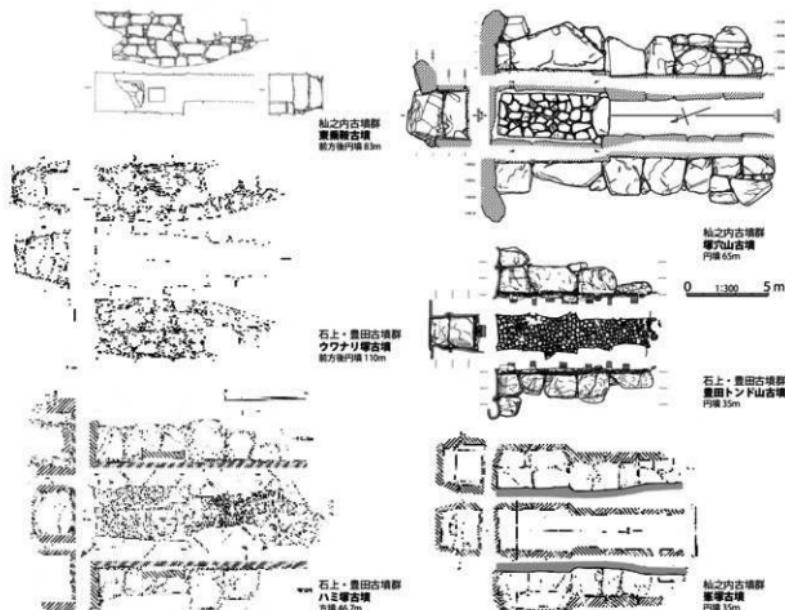


064 豊田トンド山城と豊田城（豊田山城）

東方約0.8kmの地点に豊田城（豊田山城）がある。山麓では中世の居館遺構が見つかっている。

布留遺跡周辺の大型横穴式石室

065 布留遺跡周辺の大型横穴式石室
布留遺跡周辺の大型横穴式石室を有する古墳。塚穴山古墳は玄室長7mの巨大石室。



石上・豊田古墳群と別所古墳群 調査研究の歩み

066 石上・豊田古墳群と別所古墳群 調査研究の歩み
櫻原考古学研究所・天理市教育委員会・埋蔵文化財天理教調査団などにより調査が続けられてきた。

| | | |
|------------|---|--------------------------------------|
| 大正7(1918) | 梅原未治氏 | 石上大塚古墳・ウワナリ塚古墳・別所羅子塚古墳の調査 |
| 昭和25(1950) | 鍋ヶ尾支群の調査 (2号墳・3号墳・5号墳) | |
| 昭和25(1950) | 梅原未治氏 | ホリノヲ1240 墓地出土古墳について紹介 |
| 昭和34(1959) | 櫻考研 | 石上大塚古墳・ウワナリ塚古墳の調査 |
| 昭和41(1966) | 櫻考研 | アミダラ支群・岩屋大塚古墳の発掘調査 |
| 昭和44(1969) | 櫻考研 | ホリノヲ支群の発掘調査 |
| 昭和46(1971) | 櫻考研 | 石峯支群の発掘調査 |
| 昭和46(1971) | 河上邦彦氏 | 別所大塚古墳・石上大塚古墳・ウワナリ塚古墳の紹介 |
| 昭和49(1974) | 河上邦彦氏 | 「石上古墳群」130基ほどあると紹介 |
| 昭和50(1975) | 櫻考研 | 『石上・豊田古墳群I』刊行 ホリノヲ支群6基 石峯支群6基の発掘調査報告 |
| 昭和50(1975) | 櫻考研 | 石峯北支群・石上支群・タキハラ支群の発掘調査 |
| 昭和51(1976) | 『石上・豊田古墳群II』刊行 石峯支群4基・石上北支群8基・タキハラ支群5基の発掘調査報告 | |
| 昭和52(1977) | 天理大学歴史研究会 | 別所羅子塚古墳の測量調査報告 |
| 昭和53(1978) | 天理大学歴史研究会 | 坪ヶ谷支群の測量調査報告 |

| | | |
|------------|-------------|------------------------------------|
| 昭和59(1984) | 埋蔵文化財天理教調査団 | 豊田山遺跡 (西ノ森支群)・平尾山遺跡 (平尾山西支群) の発掘調査 |
| 昭和60(1985) | 天理市教委 | 櫻谷古墳の発掘調査 |
| 昭和61(1986) | 埋蔵文化財天理教調査団 | 例所裏山遺跡の発掘調査 (石川支群) |
| 昭和61(1986) | 天理市教委 | 平尾山2号墳の発掘調査 |
| 平成2(1990) | 櫻考研 | 石峯支群の発掘調査 (12・13、16~20号墳) |
| 平成2(1990) | 天理市教委 | 等山古墳の発掘調査 |
| 平成3(1991) | 天理市教委 | 鍋ヶ尾8号墳・9号墳の発掘調査 |
| 平成2(1995) | 天理市教委 | 平尾山1号墳の発掘調査 |
| 平成8(1996) | 櫻考研 | ハミモリ古墳の発掘調査 |
| 平成10(1998) | 古川毅氏 | ウワナリ塚古墳の横穴式石室回面紹介 |
| 平成11(1999) | 天理市教委 | ダンゴ塚古墳の発掘調査 |
| 平成13(2001) | 08D-0226 古墳 | 全長32.5mの前方後円墳として紹介 |
| 平成25(2013) | 天理市教委 | 別所羅子塚古墳の立会調査 |
| 平成26(2014) | 天理市教委 | 豊田トンド山古墳の発掘調査 (平成27年まで) |
| 平成27(2015) | 天理市教委 | 豊田櫻谷古墳の発掘調査 (平成28年まで) |
| 令和2(2020) | 天理市教委 | 『大和布留遺跡における歴史的景観の復元』刊行 |
| 令和4(2022) | 天理市教委 | 『豊田トンド山古墳』刊行 |

III 石上・豊田古墳群の中小古墳

石上・豊田古墳群では、すでに紹介した大型前方後円墳などの首長墳のほかに、中小規模の円墳が尾根上や谷に面した斜面に多数分布している。こうした中小規模の円墳は5世紀には築造が始まるが、本格的に横穴式石室を中心とした群集墳が古墳群全体に広がるようになるのは6世紀中葉以降である。古墳の築造は7世紀前半まで続く。

古墳群は分布のまとまりによっていくつかの支群に分けられると考えられている。支群ごとに墳丘や横穴式石室の規模を比較すると、規模が相対的に大きいアミダヒラ・ホリノヲ・タキハラ・孤ヶ尾（東）・中ノ谷狐塚の各支群と、規模が相対的に小さい石上北・石峯北・石峯南の各支群に二分できる。石上・豊田古墳群で古墳築造が最も盛んになった6世紀中葉から後葉にかけて、上位階層の支群と下位階層の支群が並存していたことがうかがえる。

これまでの発掘調査により様々な遺物が出土しているが、とりわけ鍛冶に関する遺物の出土例が目立つのが、この古墳群の特徴である。ホリノヲ2号墳には鍛冶工具（鉄鋤・鉄鎌）が副葬されていたほか、編羽口や鉄滓など鍛冶関連遺物が複数の古墳から見つかっている。石上・豊田古墳群の南側に広がる布留遺跡では集落内で盛んな手工業生産がおこなわれており、奈良盆地を代表する鍛冶生産遺跡としても知られている。こうした布留遺跡の工人集団と石上・豊田古墳群を築いた集団は密接に関わっていたのだろう。



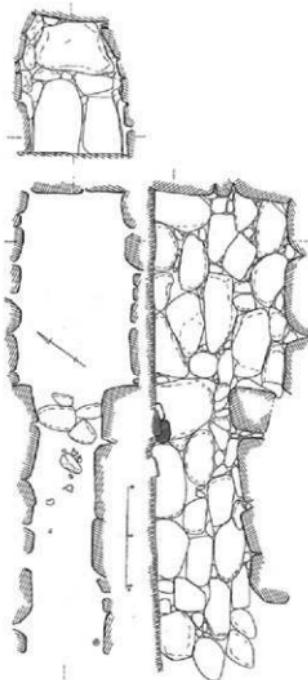
067 空から見た石上・豊田古墳群

名阪国道の建設とその後の天理東IC改良工事が契機となって石上・豊田古墳群の調査が進展した。写真は石上北支群・石峯北支群・タキハラ支群などの調査時の航空写真。

アミダヒラ支群

岩屋町集落東方、岩屋谷に面した北向きの斜面中腹に密集して分布する支群である。名阪国道の建設事業に伴って、昭和39（1964）年に樋原考古学研究所が6基の古墳を発掘調査した。

いずれの古墳も斜面下方のみに盛土をして築いたものである。1～4号墳は直径15m程度の円墳で、いずれも両袖式、玄室長3.25～4.5mの規模を有する。石室は斜面に平行する方向に開口していた。5号墳・6号墳は無袖式の小規模な横穴式石室で墳丘を持たない。



070 アミダヒラ2号墳 横穴式石室実測図
直径約15mの円墳。横穴式石室は全長約9.4m、
玄室長約4.1m、玄室幅約2.3m。



068 アミダヒラ支群 遠景

谷に面した北向き斜面に築かれた古墳群。名阪
国道建設で消滅した。最高所にあるのが2号墳。



069 アミダヒラ支群 測量図

斜面に表れた半円形の膨らみが1～4号墳の痕跡。
5・6号墳は小規模な石室のみ。



071 アミダヒラ2号墳
横穴式石室玄室奥壁

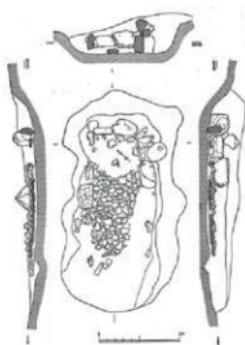
いそのかみきた 石上北支群

名阪国道天理東インター東方の一群で、岩屋谷に突き出した2本の尾根上（A尾根・B尾根）に分布する。名阪国道の供用後に実施された天理東インターの改良工事に伴って、昭和50（1975）年に奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を実施した。

6世紀中葉に支群内で最初に築かれたと考えられているA6号墳は木棺直葬であったが、その後は横穴式石室が採用されるようになった（A5・A7・A8号墳）。6世紀後葉になるとさらに築造範囲が広がっていく（A9・B1～B3号墳）。

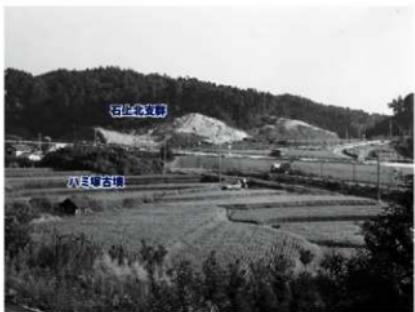


074 石上北支群・石峯北支群 測量図
尾根筋上に点在する石上北支群と、谷沿いに点在する石峯北支群。支群によつて古墳の立地に違いがある。



075 石上北A8号墳 横穴式石室実測図
基底部のみかろうじて残った石室。玄室は現存長3.7m。

076 石上北A8号墳 横穴式石室
この石室に限らず、石上北支群や石峯支群では石取りにより石材がほとんど失われた石室が多くた。



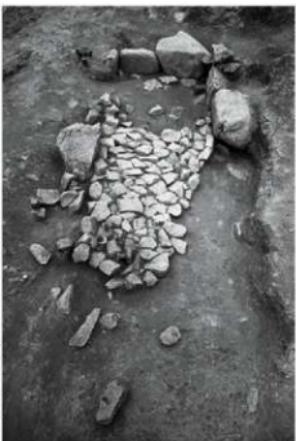
072 石上北支群 遠景

石上北支群は岩屋谷に突き出た2本の尾根筋に位置する。写真左にはハミ塚古墳が写っている。



073 石上北支群 全景

天理東ICの拡張工事が石上北支群の調査のきっかけとなつた。



いしのみなみ
石峯北・石峯南支群

石峯北支群 石上北支群南側の谷筋に分布する支群で、谷に面した南斜面上に展開する。昭和46(1971)年、同50(1975)年に道路建設等に伴って樋原考古学研究所が発掘調査を実施した。さらに、平成2(1990)年にも水道施設建設に伴って樋原考古学研究所が発掘調査を実施している。

支群全体で20基程度の分布が知られているが、多くの古墳は6世紀後葉に築造されたものである。



077 石峯5号墳 横穴式石室玄室

石峯北支群は小規模な古墳が多く、5号墳は径9m。石室も幅1.2mの小規模なものであった。



079 石峯6号墳 横穴式石室玄室

長さ2.5m、幅1mの小規模な玄室。

石峯南支群 石峯北支群南側の尾根上に分布する支群である。昭和46(1971)年に道路拡幅工事に伴って樋原考古学研究所が発掘調査を実施した。支群全体で5基が把握されているが、調査がおこなわれたのは1~3号墳である。2号墳は6世紀中葉に遡りうるが、1号墳・3号墳は6世紀後葉に位置づけられる。

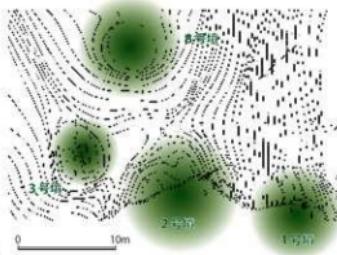
081 石峯南支群 平面図

石峯北支群の分布は前頁参照。

078 石峯5号墳・6号墳 横穴式石室実測図
 石峯5号墳・6号墳の横穴式石室は石取りで石材の多くが失われていた。

080 石峯6号墳 須恵器壺

奥壁付近から出土した壺。高さ12cm。



ホリノヲ支群

石峯南支群南側の尾根上に分布する支群である。

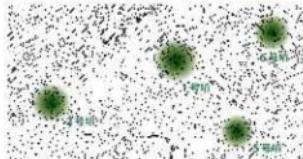
斎藤忠氏は昭和5(1930)年におこなわれた碎石作業中に出土した遺物を報告したが、これは後にホリノヲ1号墳のものと判明した。さらに、昭和41(1966)年には土砂採取に伴って奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を実施したが、その後調査結果を踏まえて保存の措置が講じられた。

6世紀前葉に木棺直葬の主体部を持つ3号墳が築かれる。6世紀中葉には片袖式の横穴式石室を有する1・2・4・5号墳、6世紀後葉には最高所に6号墳が築造された。ホリノヲ支群は7世紀に入っても石室への追葬(再利用)がおこなわれることも特徴である。



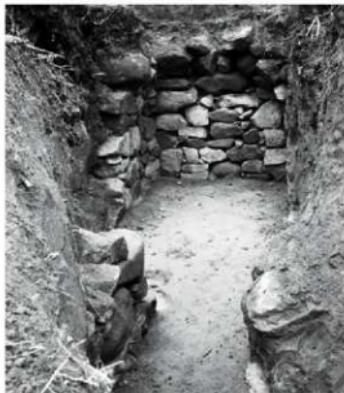
082 ホリノヲ支群 6号墳と1号墳

ホリノヲ支群を名付ける理由の一つとして、この二つの古墳があることである。



083 ホリノヲ支群 測量図

最高所の6号墳の位置から分岐した
2本の尾根上に古墳が分布する。



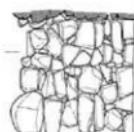
085 ホリノヲ1号墳 横穴式石室

石取りにより側壁や天井の石材は失われていた。調査時の聞き取りにより昭和5(1930)年に遺物が出土した「豊田古墳」と同じ石室であることが判明。

084 ホリノヲ1号墳

横穴式石室実測図

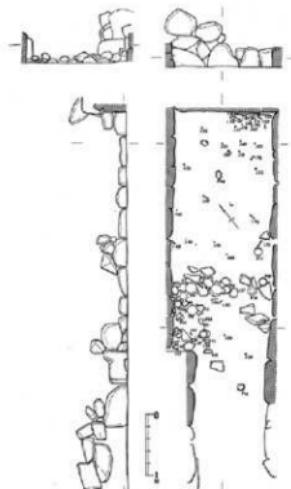
片袖式の横穴式石室。
長さ3.3m、幅1.9m
の玄室に長さ2.8mの
羨道が取り付く。



086 ホリノヲ1号墳 旋回式獸像鏡

直径13.5cm。内区に獸像と神像を4体ずつ配置する倭製鏡。この銅鏡を含む昭和5(1930)年の出土遺物は東京国立博物館が所蔵している。





087 ホリノヲ 2 号墳 横穴式石室実測図
墳丘は径 18 m。横穴式石室は片袖式で、玄室は長さ 3.9 m、幅 1.6 m ある。



089 ホリノヲ 2 号墳 鉄鉗・鉄鎚
左から鉄鉗（長さ 43cm）・鉄鎚。鍛冶工具の出土が目立つのは石上・豊田古墳群の特徴である。



090 ホリノヲ 2 号墳 須恵器提瓶
器高 24.5cm。2 号墳からは提瓶 3 点が出土した。

088 ホリノヲ 2 号墳
横穴式石室

石材はほとんど抜かれていたが遺物はよく残っていた。石室の破壊が盗掘目的ではなく、石材を転用するためであったことがうかがえる。



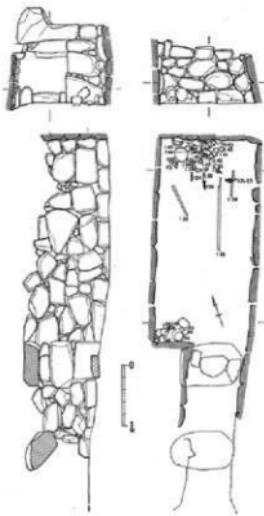
091 ホリノヲ 2 号墳 耳環
銅芯金張の耳環（直径 21mm）。



092 ホリノヲ 2 号墳 勾玉・小玉
写真左から水晶製勾玉（長さ 31mm）、天河石（アマゾナイト）製勾玉、青色ガラス製小玉。古墳時代の天河石製玉は珍しい。

093 ホリノヲ 2 号墳 切子玉
水晶製切子玉（右下の長さ 14mm）。





094 ホリノヲ4号墳 横穴式石室実測図
埴丘は径14m。横穴式石室は片袖式で、
玄室は長さ3.3m、幅1.6mある。

095 ホリノヲ4号墳 横穴式石室

奥壁から羨道方向を見た写真。
天井石は羨道の2石を除いて
全て持ち去られていた。奥壁
と袖部付近から遺物が集中し
て出土した。



096 ホリノヲ4号墳 雲珠・辻金具・杏葉
金剛装の馬具。左上から雲珠、辻金具、
杏葉である。雲珠・辻金具は馬に装着し
たベルト(繩)の交点に用いる。杏葉は
馬の胸や尻に垂下して飾る金具である。



097 ホリノヲ4号墳 円形飾金具
馬具の一種。鞍の飾金具であった可能性
が指摘されている。



098 ホリノヲ4号墳
須恵器台付長颈壺

奥壁付近から出土した。
器高45.9cmは石上・豊
田古墳群では最大。



099 ホリノヲ4号墳
須恵器双口壺

器高17cm、二つの頸が連
接した形の珍しい須恵器
で、内部は粘土板で完全
に仕切られ、それぞれ独
立した空間になっている。

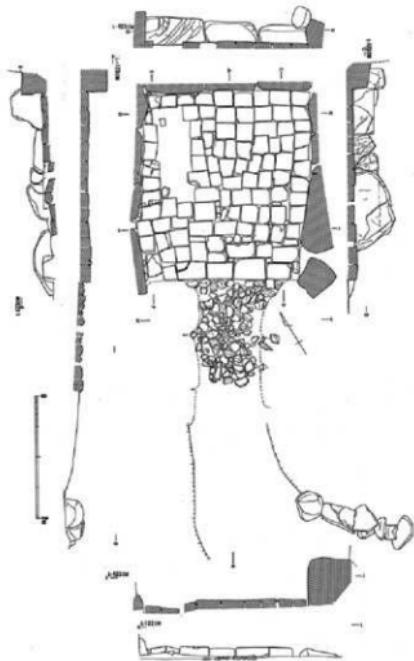
タキハラ支群

ホリノヲ支群南側の谷沿い斜面に分布する。昭和50(1975)年に道路工事に伴って奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を実施した(1~5号墳)。片袖式の横穴式石室を有する5号墳は6世紀前葉に遡り、石上・豊田古墳群では最も初期の横穴式石室である。1・2・4号墳は6世紀後葉、3号墳は7世紀前葉の築造である。タキハラ3号墳は横穴式石室に天理砂岩を使用していることで知られている。



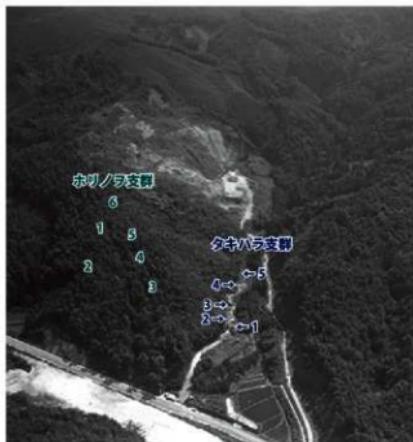
101 タキハラ支群測量図

直径10m前後の円墳が並ぶ。古墳同士が数mしか離れていないところもある。



102 タキハラ3号墳 横穴式石室実測図

タキハラ支群最大の3号墳は径16m。横穴式石室は玄室が正方形に近く、長さ約3.1m、幅約2.7m。羨門付近には埴丘裾の石列(外護列石)も残る。



100 ホリノヲ支群とタキハラ支群 全景

尾根筋に築かれたホリノヲ支群とは異なり、タキハラ支群は谷に面した斜面上に分布している。



103 タキハラ3号墳 横穴式石室

玄室壁面の石材は花崗岩だが、ほとんど失われていた。床面には天理砂岩を隙間なく敷き詰めている。羨道は幅約1mで床面に砾を敷いている。



104 タキハラ3号墳 横穴式石室玄室床面の敷石

床面に敷かれた天理砂岩の切石。石は壁側から並べたらしく、最後にL字形に加工した石で中央を埋めている。



105 タキハラ 3号墳 玄室敷石 1

長辺約 27cm、短辺約 21cm、厚さ約 13cm の敷石。ほぼ直方体の形状に切り出した砂岩である。各面には石材を切り出して整形した際の加工痕が明瞭に残る。



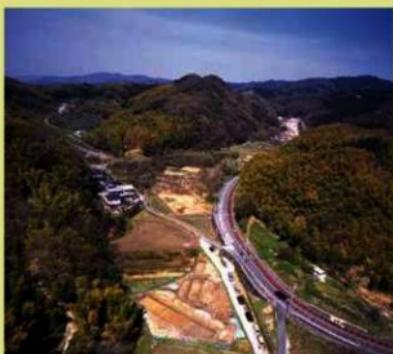
106 タキハラ 3号墳 玄室敷石 2

長辺約 32cm、短辺約 21cm、厚さ約 12cm の敷石。直方体の一面を切り欠いて L字形にしたもので、玄室中央で用いられた。切り欠き部の加工痕がその他の面より明らかに粗いのは、石室構築現場で加工したためだろうか。

“天理砂岩”

奈良盆地東縁の丘陵には「藤原層群」と呼ばれる海成層が分布している。藤原層群のなかのひとつ、貝化石を含む冲合相の「豊田堅層」の砂岩ーシルト岩は、考古学的には「天理砂岩」と呼ばれる。石上・豊田古墳群の中央に位置する通称「豊田山」は、この天理砂岩が採れることで知られている。

天理砂岩は主に飛鳥地域において、古墳時代終末期～飛鳥時代の庭園や古墳に用いる切石として好まれた。一方、採取地である天理地域での使用例はごくわずかで、石上・豊田古墳群のタキハラ 3号墳石室床石、杣之内古墳群の峯塚古墳の墳丘貼石が知られるのみであり、飛鳥地域とはきわめて対照的な様相を見せている。



107 南から見た豊田山

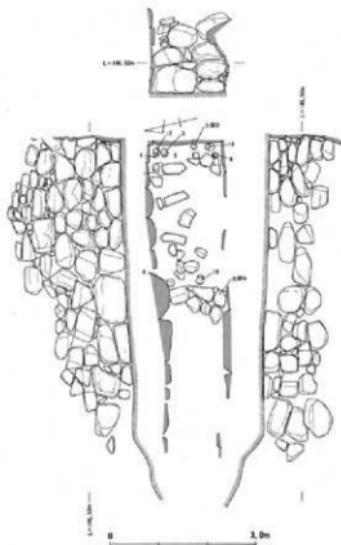
写真中央の三角形の山が通称「豊田山」。周辺には石上・豊田古墳群が広がっている。

きつねがお 狐ヶ尾支群

名阪国道天理東インターの西側一帯に広がる支群で、南北方向に走る谷の東側に13基、谷の西側に前方後円墳1基を含む44基が確認されている。谷の東側を「狐ヶ尾東支群」、谷の西側を「狐ヶ尾中支群」と細分する案もあるが、本書では両者を一括して「狐ヶ尾支群」としておく。谷の東側は尾根上に立地しているが、谷の西側では上部の古墳が尾根上に分布する一方、下部は尾根端部に密集する。

発掘調査は谷の東側のみで進展しており、昭和25(1950)年に道路工事に伴う事前調査として古墳3基(2・3・5号墳)の調査が奈良県教育委員会によりおこなわれ、平成3(1991)年には水道施設工事に伴う事前調査として2基(8・9号墳)の調査が天理市教育委員会により実施された。6世紀中葉に3・5号墳が、6世紀後葉に2・8・9号墳が築造された。

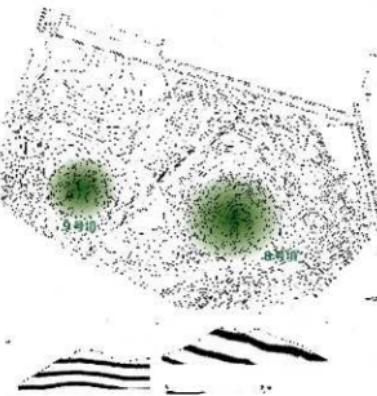
谷の西側では発掘調査事例がないが、現地踏査により前方後円墳1基が石上・豊田226号墳として報告されている。全長32.5mの前方後円墳で、主体部は明らかでないものの、墳丘上で円筒埴輪片が採集されている。円筒埴輪片は6世紀前半のものとみられる。



110 狐ヶ尾9号墳・8号墳
石室は全長6.5m。内部から須恵器、土師器、鉄製品等が出土した。



108 東から見た狐ヶ尾8号墳・9号墳
写真手前は天理東ICである。周辺にはかつて1~7号墳が存在したが、道路建設等により消失している。



109 狐ヶ尾8号墳・9号墳測量図
8号墳は盆地側に当たる西向きの横穴式石室、9号墳は山側に当たる南向きの横穴式石室を持つ。二つの古墳はともに6世紀後葉の築造と考えられている。

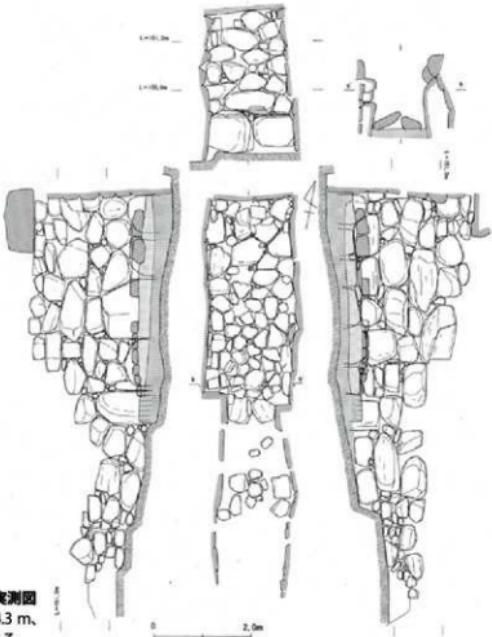


111 狐ヶ尾9号墳 横穴式石室
墳丘は東西約13m、南北約11m、高さ約2.5m。内部には天井石がほぼ失われた横穴式石室が残っていた。



112 狐ヶ尾8号墳 墳丘測量図

墳丘は東西約20m、南北約16m、高さ約4m。
横穴式石室の西側には2基の小石室があったが、
遺物は出土しなかった。



113 狐ヶ尾8号墳 横穴式石室実測図

石室は全長8.2m、玄室長4.3m、
奥壁幅1.6mの両袖式石室である。



114 狐ヶ尾8号墳

横穴式石室は玄室の天井石の一部が残存してい
た。



115 狐ヶ尾8号墳 墳丘裾の排水施設

墳丘裾からは石材を並べて作った排水施設が見つ
かった。完成後には埋め戻して暗渠としていた。



116 狐ヶ尾8号墳 玄室内の遺物出土状況

玄室から漆道を見たところ



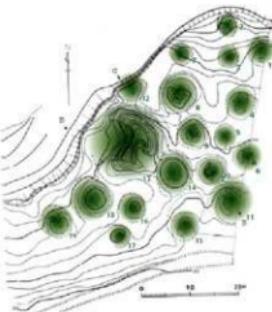
つぼがたに 坪ヶ谷支群

狐ヶ尾支群の西側一帯に広がる支群である。「狐ヶ尾西支群」と呼称されたこともあるが、のちに天理大学歴史研究会がおこなった測量調査を経て「坪ヶ谷古墳群」として報告された。19基の円墳の存在が報告されており、その多くは直径10m以下である。遺物が判明している古墳ではなく、築造時期に関する手がかりは今のところ得られていない。

118 坪ヶ谷支群

測量図

測量作業は昭和52(1977)年に天理大学の学生によりおこなわれた。



ひらおやまにし 平尾山西支群

石上大塚古墳西方の一群で、「平尾山西支群」の呼称が与えられている。複数の尾根上に円墳が散在しているが支群内を通した付番はおこなわれておらず、調査機関ごとの付番がなされている。天理市教育委員会は昭和61(1986)年に道路建設に伴って平尾山2号墳を、平成7(1995)年には水道施設建設に伴って平尾山1号墳の発掘調査を実施した。

また、埋蔵文化財天理教調査団が道路改良工事に伴って平尾山遺跡を発掘調査するなかで3基の古墳が調査されている(平尾山遺跡1~3号墳)。平尾山遺跡1号墳・3号墳は6世紀後半とみられているが石室の詳細は判明しておらず、平尾山遺跡2号墳では時期の手がかりが得られていない。



120 平尾山1号墳 全景



121 平尾山1号墳 内筒埴輪列



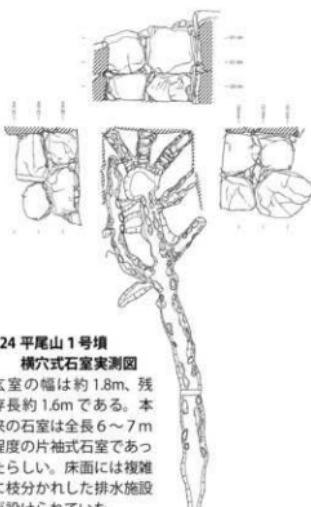
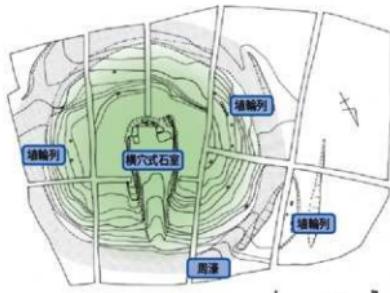
122 平尾山1号墳 横穴式石室



123 平尾山1号墳 玄室内排水施設

119 平尾山1号墳 墳丘測量図

直径約23mの円墳で、周濠と外堤を持ち、円筒埴輪列を樹立しているのが特徴である。



124 平尾山1号墳

横穴式石室実測図

玄室の幅は約1.8m、残存長約1.6mである。本来の石室は全長6~7m程度の片袖式石室であつたらしい。床面には複雑に枝分かれした排水施設が設けられていた。



125 平尾山1号墳 玉類・鉄製品

玉類にはガラス玉、水晶玉がある。また、金銅装の飾金具のほか、鉄環・馬具類が出土した。



126 平尾山1号墳 墳輪・須恵器

円筒埴輪のほか、石見型埴輪、盾形埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪など各種形象埴輪が出土。須恵器は断片化していた。



127 平尾山1号墳

双脚輪状文埴輪
双脚輪状文は古墳時代後期に流行したモチーフである。平尾山1号墳からは埴輪破片が出土。

128 平尾山1号墳 小札など

小札は円頭形の小型鐵板で、これを縫じ合わせたものが古墳時代の甲冑の一種である挂甲。平尾山1号墳からは約200点の小札が出土しており、石上・豊田古墳群ではほかに例を見ない。

天理市教育委員会が調査した平尾山1号墳の石室石材は玄室の一部を残すのみであったが、奥壁の構成等から6世紀中葉とみられる。1号墳は石上・豊田古墳群の円墳としては規模が大きく（直径23m）、墳丘および外堤に埴輪列を有すること、各種形象埴輪や馬具・武具の保有などが特筆される。

平尾山2号墳も石室石材のほとんどが失われていたが、出土遺物から6世紀後葉の築造とみられる。



130 平尾山2号墳 横穴式石室

石室は徹底的に破壊され東壁も失われていたが、遺物はよく残っていた。

131 平尾山2号墳 剥片品

須恵器・土師器の集合写真。このほか耳環や馬具（雲珠）の破片が出土している。



129 平尾山2号墳 墳丘測量図

墳丘はほとんど削平されており、本来の規模は不詳。石室は基底部がかろうじて残っていた。

ひらおやま しめんばごし 平尾山遺跡の四面庇付建物

平尾山 1号墳・2号墳から西に 100 m ほどの地点で、昭和 59 (1984) 年に埋蔵文化財天理教調査団により発掘調査が実施された。

この調査では 6 世紀末～7 世紀初頭墳とみられる四面庇付の大型掘立柱建物が見つかった。四面庇付建物は寺院や役所など格式の高い建物で用いられることが多く、石上・豊田古墳群の被葬者とどのような関わりがあったのか興味深い。



132 平尾山遺跡 四面庇付掘立柱建物跡
4間×3間の身舎のまわりに6間×5間の柱穴列(庇)。

西ノ森支群

平尾山西支群の南側に所在する。道路事業に伴って埋蔵文化財天理教調査団が昭和 59 (1984) 年に発掘調査を実施し、「豊田山遺跡」として報告した。調査では弥生時代の高地性集落の遺構が見つかったほか、古墳時代の直径 15 m 程度の円墳 2 基も検出された。

北側の C I 号墳は主部は削平されていたが、墳丘裾から円筒埴輪・草摺形埴輪・鳥形埴輪・家形埴輪の破片と鉄鎌片が出土した。南側の C II 号墳は粘土標のうち僅かに床面が残ったもので、礫を敷きつめた上に粘土を張っていた。鉄鎌・刀子が副葬されていたほか、周辺から鉄剣と小型仿製鏡が出土した。

埴輪などの遺物は 5 世紀前半のもので、石上・豊田古墳群では最も古い時期の群集墳である。



135 西ノ森支群 C I 号墳
草摺形埴輪

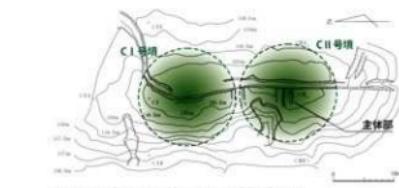
幅約 17 cm。草摺は甲冑の付属具で腰から下を守る防具。武人埴輪の一部である。

136 西ノ森支群 C II 号墳
小型仿製鏡

幅 3.4 cm。復元径は 10 cm 程度の小型の鏡である。縁は断面が蒲鉾形。



133 西ノ森支群
測量図



134 西ノ森 C I 号墳・C II 号墳 测量図



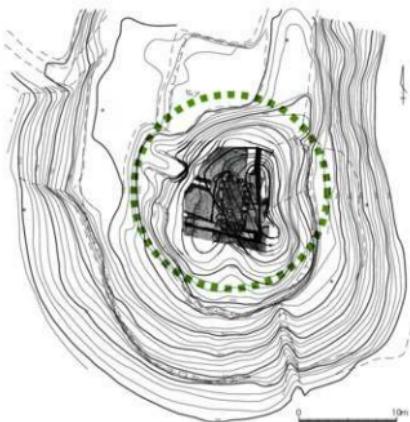
137 西ノ森支群 C II 号墳主体部

C II 号墳の主体部は粘土標で、礫を敷きつめた上に粘土床を張る構造だった。

豊田狐塚古墳

豊田狐塚古墳は豊田トンド山古墳の南東方約100mに位置する。丘陵の尾根筋の南端に築かれており、墳丘は直径20m程度の円墳である。見つかった横穴式石室は南方向に開口し、両側に袖部を有する両袖式の石室である。調査区内に玄室全体と羨道の一部が含まれており、羨道の南側は調査区外に延びていた。玄室は床面で全長約4.4m、奥壁幅約2.2m、床面からの高さが約2.2mある。天井石と側壁の一部の石材は石材採取により失われていた。壁面には30~100cm程度の大きさの石材を7段程度積んでいた。

盗掘は玄室の中央付近で一部床面にまで達していたものの、それ以外の部分では埋葬当時の状況を比較的よく残していた。床面には木質が残存する箇所があり、少なくとも3基の木棺が安置されていた可能性がある。出土遺物には鏡（旋回式獣像鏡）、馬具、鉄刀、鉄鏃、玉類、須恵器、土師器などがある。出土遺物の時期は6世紀中葉～後葉のものとみられる。玄門付近の須恵器には奥壁付近の須恵器よりやや新しい時期のものがあり、追葬がおこなわれた可能性がある。



138 豊田狐塚古墳 墳丘測量図

尾根筋を利用してつくられた円墳。南向きに横穴式石室が開口するが、調査した範囲は玄室と羨道の一部のみで、羨道は調査区外に延びている。

139 北から見た豊田狐塚古墳

布留遺跡や石上神宮を見下ろす尾根の末端につくられた円墳。横穴式石室は南向きに開口していた。

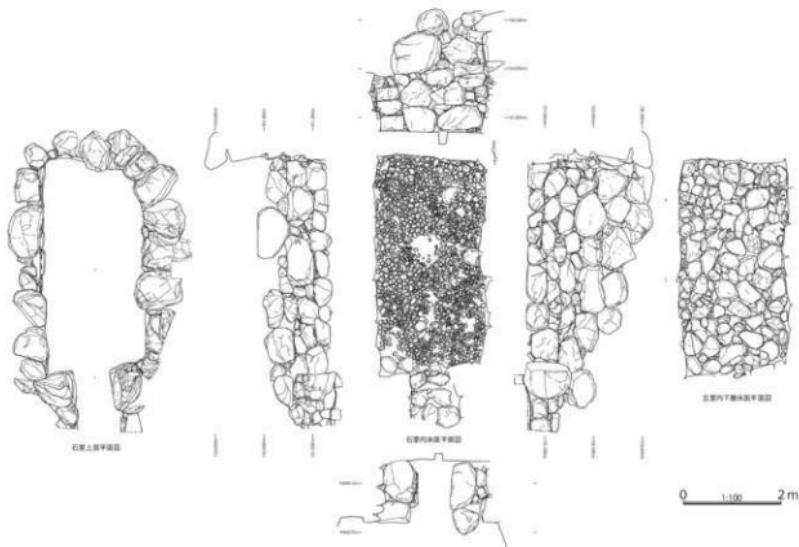


140 豊田孤塚古墳 南から見た横穴式石室
玄室奥壁、側壁ともに上位の石材は失われていた。床面上は盗掘を受けていたが、
それでも副葬品が豊富に残されていた。





141 豊田孤塚古墳 北西から見た構穴式石室
玄門付近には副葬された土器が集中してい
た。床面には板状の木質が3ヶ所残ってお
り、3基の木棺を納めていたことがうかが
える。写真奥の調査区外に向かって羨道が
延びている。



142 豊田孤塚古墳 構穴式石室実測図

床面は上層・下層の二面。下層は20～50cm 大の石材で構成
されており、玄室内に限り5～15cm 大の石材で構成される上
層床面がある。上層と下層の間には厚さ約10cm 程度の土層が
介在する。副葬遺物は基本的に上層床面上から出土したが、下
層でも少量ながら須恵器・鉄鏃等が出土している。



143 豊田孤塚古墳 旋回式獸像鏡

直径 9.4cm。旋回式獸像鏡は5世紀後半を中心に製作された倭製鏡で、内区に同じ方向を向く神像が配置されるのが特徴。



145 豊田孤塚古墳 振じり環

幅 6.1cm。大刀の飾り金具。振じり環頭大刀は日本列島で独自に発展した装飾大刀である。

147 豊田孤塚古墳 金銅装馬具

金銅装の雲珠、辻金具、三葉文精円形杏葉は玄室の東側壁付近に集中していた。街先覆金具も出土しており、本来は金銅装の鏡板付嚢を有していた可能性が高い。

146 豊田孤塚古墳 (26)

嚢は馬の口に街えさせる馬具。豊田孤塚古墳からは環状鏡板付嚢 2 セットが出土。



144 豊田孤塚古墳 玉類

右下から青色ガラス製小玉、土製丸玉・環玉・水晶製丸玉・管玉・切子玉、銀製空玉、琥珀製丸玉・平玉。



三葉文精円形杏葉



148 豊田古墳群 副葬品

武器は鉄刀と鐵鎌が出土している。鐵鎌は約40点以上が副葬されていた。

「狐塚」の伝承

豊田古墳群には「宝物」の出土とその後の顛末にかかわる伝承が残されている。「狐塚」から出土した遺物を持ち帰った人物が自分の首が曲がらなくなるという怪現象に遭遇し、翌日に遺物を埋め戻しに行ったところ身体がもどに戻ったというもので、県内の説話を収集した文献に採録されている。類似する話は地元にも伝わっている。

また、別の記録によれば、江戸時代の末期に狐塚から遺物を取り出した者がいたという。

豊田古墳群の横穴式石室の発掘調査では、羨道内の床面より10cm以上高い位置において、人為的に埋め戻したような状態で旋回式獸像鏡が実際に出土した。こうした伝承が実際に起きた出来事をある程度反映したものであったことをうかがわせる。

「狐塚」

豊田の東に狐塚というのがある。

昔、開墾の目的でこれを掘り崩した人がある。中から箕に二杯ほど宝物が出た。ところがその晩になって、荒々しくその家の門を叩く者がある。出てみると誰もいない。戸を開めて内へ入るとまた叩く。幾度もこのようにしている内に、その人は頭が曲がって動かなくなってしまった。

これは狐塚にいる古狐のしわざであろうと思つて、翌朝もとの通り宝物を埋め返すと、やがてまたもとの身体になった。

乾 健治 1933『狐塚』(高田十郎(編))『大和の傳説』大和史跡研究会

149 豊田古墳群 旋回式獸像鏡の出土状況
写真奥が羨道、手前が玄室で、獸像鏡は写真中央から出土した。本来の床面からは10cm以上高い位置であり、周囲の土の色も異なる。人為的に埋め戻された可能性が考えられる。



つかひら 塚平古墳

岩屋集落北側の尾根を登りつめた標高約320m付近に立地する方墳で、周辺の古墳の中では最高所に位置する。尾根の稜線から一段下がった南斜面に一辺約30mの方形の区画を削りだし、その中央に方形の墳丘を造っている。本来は一辺16m前後の方形の墳丘であったと考えられている。

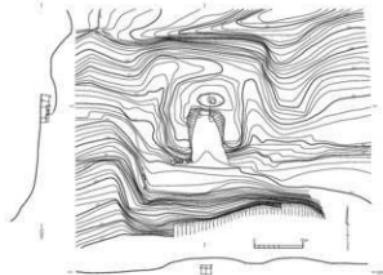
墳丘には南に開口する花崗岩切石の横穴式石室がある。石室の南側は破壊されているが、奥壁付近は天井石まで残存している。石室の切石の隙間に漆喰が遺存していたと報告されている。石室の形態から7世紀中葉以降の築造と考えられている。



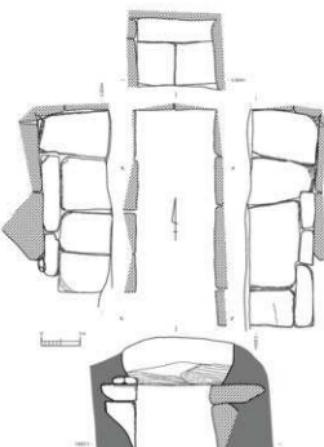
152 塚平古墳
横穴式石室



153 塚平古墳
横穴式石室奥壁



150 塚平古墳 墳丘測量図
稜線を避けて斜面に寄せて墳丘を造當するの
は終末期古墳にしばしば見られる特徴。



151 塚平古墳 横穴式石室実測図
奥壁幅約2.1m、東側壁の長さ約5.2m、排水溝・敷石などは認められない。

十三塚古墳群

昭和49(1974)年に刊行された『奈良県の主要古墳II 緑地保全と古墳保護に関する調査報告II』で紹介された古墳群。研究史を尊重して「十三塚古墳群」と呼ぶが、本来は支群として扱うべきであろう。

ハミ塚古墳の北方の尾根上に直径10~25m程度の円墳20基あまりが確認されている。発掘調査はおこなわれていないが、横穴式石室を内部主体としており、6世紀後半に築造されたものと考えられている。岩屋谷の北側斜面には、この十三塚古墳群のほかにも多数の小円墳が点在している。



154 十三塚古墳群の横穴式石室
『奈良県の主要古墳II』で紹介された
横穴式石室の写真。

別所古墳群

布留遺跡北方の古墳群のうち、西半に位置する別所大塚古墳を中心としたグループは、とくに別所古墳群と呼ばれることがある。従来は石上・豊田古墳群の一部とみなされることが多かったが、独立した古墳群として扱われることも増えてきている。改めて別所古墳群を、天理市別所町および豊田町西部の範囲に位置する古墳群と定義する。別所大塚古墳を中心に、^{塚山古墳}
 別所籠子塚古墳・袋塚古墳に加え、豊田町西端のダンゴ塚古墳までの前方後円墳（可能性あるものを含む）5基と、石川支群・北山支群に属する円墳17基（現状）からなる。周辺の発掘調査では未知の古墳が埋没している微候もあり、本来の古墳の総数はもっと多かったらしい。

長さ125mに達する前方後円墳である別所大塚古墳は、石上・豊田古墳群の石上大塚古墳・ウワナリ塚古墳をも上回る大きさであり、首長墳にふさわしい規模を有している。また、狭い範囲内に大型前方後円墳と小規模円墳からなる群集墳が共存していることも、石上・豊田古墳群と共通する特徴である。

石上・豊田古墳群は西ノ森支群で前駆的な造営が5世紀前半に始まるが、本格的な造営開始は6世紀に入ってからであり、最も盛行するのは6世紀中葉になってからである。一方、別所古墳群は塚山古墳以降、ダンゴ塚古墳、別所籠子塚古墳・袋塚古墳まで前方後円墳などの築造が続き、その盛行時期の重心は6世紀前半にあるといってよい。大局的には古墳造営の中心が別所古墳群から石上・豊田古墳群へと移動する様子が見て取れる。



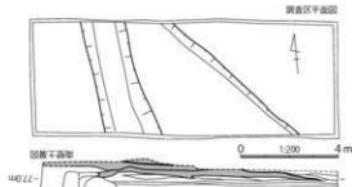
つかやま 塚山古墳

別所大塚古墳の南約 200 m に位置し、現在は墳丘は完全に消失して天理市立山の辺小学校の敷地となっている。

『山邊郡誌』によると東西約 49 m、南北約 36 m ほどの規模で周囲に池状の周濠があったとされ、『天理市史別冊古墳墓一覧』では前方部を北西に向ける前方後円墳が描かれている。また、『大和国古墳墓取調書』の絵図の表現や周辺の地割の形状から、西側に短い造り出しを有する一辻 60 m 前後の方墳であったとする見解も示されている。

平成 2（1990）年に山の辺小学校敷地内で天理市教育委員会がおこなった発掘調査では、墳丘北側の周濠の一部とみられる遺構を確認し、円筒埴輪片が出土した。

出土した円筒埴輪は 5 世紀中葉の特徴を示し、別所町に集中する 4 基の前方後円墳のなかでは最も先行して築造された可能性が高い。



156 塚山古墳 調査区平面図・墳丘復元図

前方後円墳が一応想定されているが、復元のための十分な手がかりは得られていない。



157 塚山古墳 円筒埴輪

周濠と思われる溝から見つかった円筒埴輪は表面調整（静止痕のあるヨコハケ）の特徴から、別所古墳群内では最古のものとみられる。

ダンゴ塚古墳

現在の行政区画では豊田町に属するが、古墳分布からみて石上・豊田古墳群よりは別所古墳群の一部とみなすべきであろう。

平成 11～12（1999～2000）年度に天理市教育委員会がおこなった発掘調査では、最低でも径 15 m の規模の墳丘が残存していることを確認したが、周濠は確認できなかった。また、南西方向に開口していたらしい横穴式石室の痕跡も見つかった。出土した須恵器や埴輪から 5 世紀後葉の古墳とみられている。

古記録では前方後円形であったとされ、本来は西向きの前方後円墳であつたらしい。



158 ダンゴ塚古墳 調査区平面図

西向きの前方部を有していたとされるが、発掘調査では前方部形状の手がかりは得られていない。



159 ダンゴ塚古墳
埴輪・須恵器



160 発掘調査中のタシヨ塚古墳
約から出土した埴輪。厚さ1mmの
盛土に多量埴輪が残存していた。

別所罐子塚古墳

山の辺小学校のすぐ東側に所在する前方後円墳である。西側には塚山古墳、南側には袋塚古墳が立地する。

現在も全長約 57 m の墳丘が残るが、周囲からの削平を受けており原型をとどめない部分が多い。墳丘の周囲には周濠の痕跡と思われる地割がみられ、現在はその大部分が駐車場として利用されている。

昭和 48 (1973) 年に天理大学歴史研究会により測量調査が実施された。石棺が後円部と前方部に 1 基ずつ存在するとされ、前方部のものは二上山の白色凝灰岩製の削抜式であること、後円部のものは馬門石（阿蘇ビンク石）製の棺蓋であると報告されている。前方部のものは石棺直葬とみられるが、後円部のものは横

穴式石室内に収められたものであった可能性も指摘されている。しかし、現在では墳丘に上がってもこれらの石棺材は見当たらなくなってしまっている。

墳丘から埴輪片が採集されているほか、平成 25 (2013) 年には後円部南側隣接地で駐車場工事がおこなわれ天理市教育委員会の立会調査中に円筒埴輪が出土した。円筒埴輪は 5 条 6 段で、古墳の築造時期は 6 世紀前葉と推定される。



162 別所罐子塚古墳 円筒埴輪
工事立会時に出土した円筒埴輪。写真の個体は底部
から口縁部までほぼ全形を復元することができた。



163 別所罐子塚古墳 円筒埴輪 3次元モデル
写真 162 中央の円筒埴輪の 3 次元モデル (廣瀬覚氏作成)。



161 別所罐子塚古墳 墳丘測量図
天理大学歴史研究会が作成した測量図に出土地点を示す。



とくろづか 袋塚古墳

別所鍾子塚古墳のすぐ南側に所在した前方後円墳である。現在は地上から完全に姿を消している。明治32（1899）年に山邊郡役所が作成した書類ではかろうじて墳丘が残っていたことが読み取れるが、大正2～5（1913～16）年に編纂された『山邊郡誌』では「全部開墾」と記載されており、大正初期までには墳丘が失われていたものと考えられる。

道路建設に伴って天理市教育委員会が発掘調査を3

164 南から見た別所鍾子塚古墳

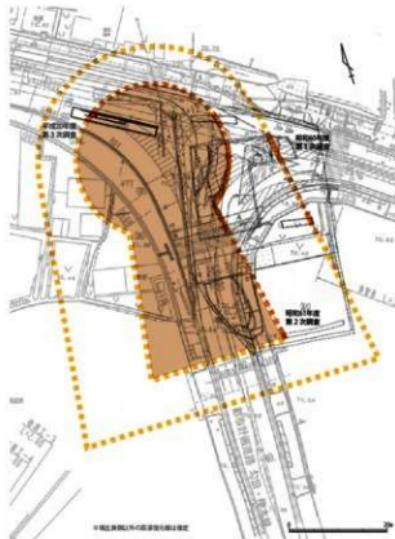
令和2（2020）年撮影。手前が後円部、奥が前方部、遠景は天理市立山の辺小学校である。通常は竹が茂っているため、このように埴丘を観察することはできない。

次にわたっておこなった。その結果、後円部から前方部にかけての埴丘・周濠の一部が埋没していることが確認され、前方部を南に向ける前方後円墳であることが判明した。全長約は 55～60 m 程度に復元される。仮に周濠が全周すると仮定すると、周濠を含めた全長は約 75 m 前後となる。

周濠内から多量の埴輪や土師器、須恵器が出土している。埴輪には円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪、石見型埴輪などが多数見られる。埴輪や須恵器の特徴からみて、古墳の時期は6世紀中葉と考えられる。



165 空から見た袋塚古墳・別所鍾子塚古墳
袋塚古墳の昭和60・1985年調査当時の写真
2基の古墳は40m程度の至近距離にある。



166 袋塚古墳 復元図

現在は道路下に眠る袋塚古墳。後円部東側から前方部東側にかけてと、後円部西侧が確認されている。



167 袋塚古墳 くびれ部検出状況

写真奥が後円部、手前が前方部である。調査時
点で墳丘は削平されていたが、埋没した周濠が
残っていた。



168 袋塚古墳 内筒埴輪出土状況
周濠の埋土から出土した円筒埴輪。内筒
5段の埴輪はほぼ空形で出土した。



169 袋塚古墳 石見型埴輪

石見型埴輪は權威を表す杖飾を模したものとも
言われる形象埴輪。



170 袋塚古墳 出土した各種の埴輪
円筒埴輪のほか、石見型埴輪、家形埴輪、大刀
形埴輪、鞍形埴輪などが出土した。

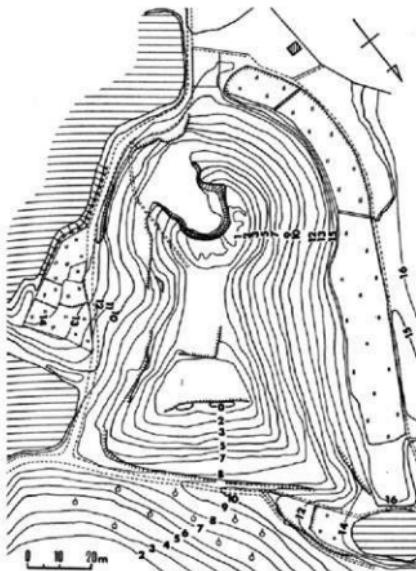
べっしょおおつか 別所大塚古墳

別所町集落の東北側に位置する前方後円墳である。別所町に集中して分布する4基の前方後円墳のうち最大規模を誇る。

丘陵の先端部を利用してつくられた墳丘は、後円部を盆地に向けている。長さ約125mで上下2段築成である。墳丘の西側には周濠と外堤が良好に残っており、周濠の幅は後円部側で約10m、前方部側で約13mある。墳丘東側は溜池が広がっており、東側にはもともと周濠がつくられていなかつた可能性もある。拳大の石が散乱しているため、葺石を有していた可能性が想定されている。また、埴輪片が採集されたことがあるともいう。

これまでに発掘調査はおこなわれていないが、明治26(1893)年に作成された『大和国古墳墓取調書』には「五尺四方斗ノ石棺ヲ出シ」と記され、この時点で横穴式石室が破壊されたことがうかがえるほか、多数の副葬品が出土したことも伝えられている。現在も後円部には奥行き20mの掘削跡があり、ここに巨大な横穴式石室が存在したと推定されている。

別所町の山の辺小学校西側には、別所大塚古墳から出土したとされる大型の石材が残されている。



171 別所大塚古墳 墳丘測量図



172 空から見た別所大塚古墳

北から見た別所大塚古墳。墳丘西側（写真下）の周濠と外堤がくっきりと見えている。



173 別所大塚古墳『大和国古墳墓取調書』絵図
明治26(1893)年に描かれた絵図。左が後円部、右が前方部である。後円部には「高三丈 石室堀取ノ跡」と記入されている。

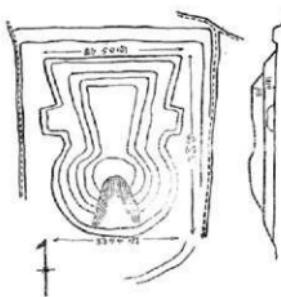
「大和丹波市町北部の古墳に就いて」

梅原末治（1893～1983）は大正3（1914）年に京都帝国大学文科大学助手となり、のち昭和14（1939）年に京都帝国大学文学部考古学研究室の2代目教授に就任した著名な東洋考古学者である。梅原は大正7（1918）年発行の『人類学雑誌』に、当時の山辺郡丹波市町（現在の天理市北部）内の古墳を島島徳八郎とともに踏査した記録（「大和丹波市町北部の古墳に就いて」）を報告している。

梅原は、現在の名称で言えば別所古墳群の別所鍾子塚古墳・別所大塚古墳・石上・豊田古墳群の石上大塚古墳・ウワナリ塚古墳・杣之内古墳群の東乘鞍古墳を順次踏査した。

報告では、踏査した古墳の墳丘や横穴式石室の略測図を掲げて形状を記し、さらに墳丘の立面構造と横穴式石室の位置関係にも注意を払う。また、個人宅に保管されていた別所大塚古墳出土と伝わる石棺材の略測図を作成し、巨大な組合式石棺の一部であったことを指摘する。

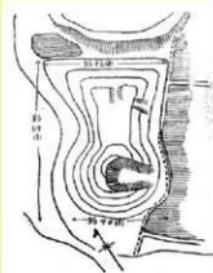
梅原はわずか2日間の踏査にもかかわらず克明な記録を残した。石上・豊田古墳群と別所古墳群の100年前の様子を今に伝える貴重な踏査記録である。



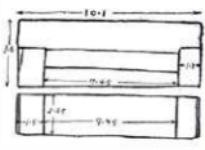
177 石上大塚古墳 略測図
墳丘長を約63間(115m)とする。
後内部の石室が破壊された痕跡や
両側面に設けられた造り出しの存
在を明瞭に描く。立面図には前面
部前面の外堀も表現されている。



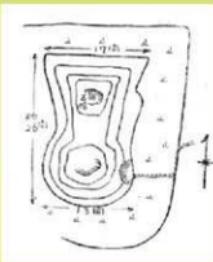
178 ウワナリ塚古墳 略測図
「八分山古墳」の名で報告された。
墳丘長を約70間(127m)とする。
後内部と前方部に黒点が並ぶのは
円筒埴輪列の表現。梅原は「明に
三重に埴輪円筒が圍繞」と記す。



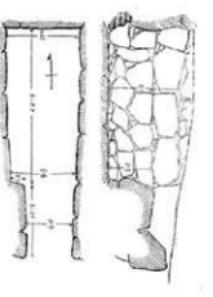
174 別所大塚古墳 略測図
墳丘長を約67間(121m)
とする。後内部の石室が破
壊された跡を描いている。



175 別所大塚古墳 石棺材
個人宅にあった石棺材の略
測図。長さ10.1尺(3.03m)
の巨大な組合式石棺の底石
である。



176 別所鍾子塚古墳 略測図
墳丘長を約26間(47m)
とする。削平が進んだ現在
に比べ、整った前方後円墳
であったことがわかる。



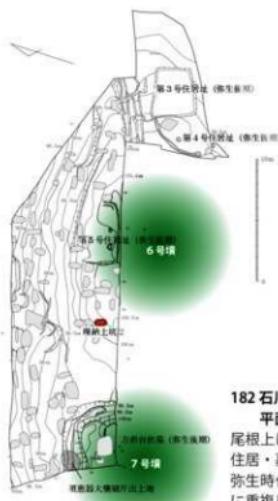
179 ウワナリ塚古墳 石室略測図
梅原を石室まで案内した村人は
「此の室内に曾て石棺のありし
を實見した」という。

いしかわ 石川支群

別所大塚古墳の南側には大池と新池という二つのため池がつくられた谷があり、さらにその南側に北東から南西に向かってのびる尾根地形がある。この尾根上では弥生時代後期の高地性集落や方形台状墓が見つかり、別所裏山遺跡と呼ばれている。これに加えて、同じ尾根上に直径 10 m 級の円墳が 10 基程度存在することも報告されており、とくに別所古墳群石川支群と呼ばれている。このうち 4 基（4～7 号墳）は養護施設の建設に伴って昭和 61（1986）年に埋蔵文化財天理教調査団により発掘調査された。

5 号墳は古墳の東側に堀割が残存しており、大型の須恵器壺身・つまみ付壺蓋 4 セットが整然と配置されていた。6 号墳でも同様の構造が発見されており、墳丘の南西部の裾に須恵器壺身・壺蓋 8 セットが埋納されていた。儀礼行為の際に使用した食器類を埋納したものと考えられている。また、7 号墳でも墳丘裾から須恵器大甕の破片が見つかっている。築造年代は須恵器から 6 世紀前半と推定されている。

発掘調査で主体部構造が明らかになった古墳はないが、調査区外の 8 号墳は木棺直葬であることが踏査時に確認できたという。



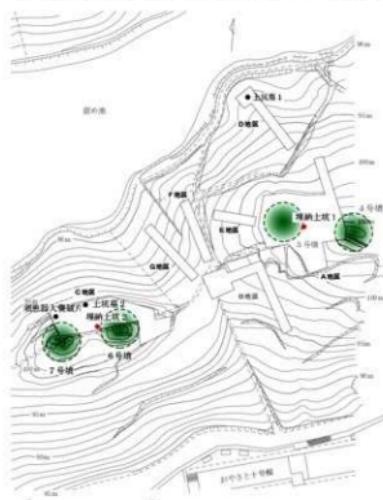
182 石川支群 6・7 号墳
平面図

尾根上に古墳と弥生時代の住居・墓が密集。7 号墳は弥生時代後期の方形台状墓に重複している。



180 石川支群 古墳分布図

埋蔵文化財天理教調査団が実施した踏査により、尾根上で 10 基の古墳が見つかった。調査区内には 4～7 号墳が所在。



181 石川支群 4～7 号墳 平面図

5 号墳・6 号墳では、墳丘裾付近で須恵器を埋納した土坑が見つかった。



183 石川支群 6 号墳 須恵器を埋納した土坑
8 セットの須恵器壺身・壺蓋を埋納していた。



184 南西から見た別所大塚古墳と石川支群

調査当時の航空写真。大池、新池である谷の南側の尾根上に石川支群が築かれており、谷の北側の尾根はより幅広く、これを利用して別所大塚古墳が築かれている。

古墳群由来とされる遺物

発掘調査の出土遺物のほかにも、石上・豊田あるいは別所古墳群に由来するらしい考古遺物がある。

獸帶鏡

天理大学附属天理参考館が所蔵する資料で、「天理市豊田山出土」とされている。内区の4個の乳の間に簡略化された獸像を配置している。ホリノヲ1号墳や豊田狐塚古墳から出土した旋回式獸像鏡と類似する銅鏡である。

革袋形須恵器

須恵器研究の大著『須恵器大成』で「石上古墳群」出土として紹介された革袋形須恵器が、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館に所蔵されている。高さ12.2cmで、革の縫じ目を突堤で表現している。

革袋形須恵器は東北アジアに分布する革（皮）袋製の容器を模したものとも言われるが、詳しいことは明らかになっていない。国内でこれまでに知られる出土例は100例に満たない。



185 天理大学附属天理参考館所蔵 獣帶鏡



186 橿原考古学研究所附属博物館所蔵 革袋形須恵器

参考文献

〔1〕奈良県北古地の古墳群

高橋史治 1918 「大和丹波府市町北部の古墳に就いて」『人間学雑誌』第33巻第2号
高橋史治 1936 「山道丹波府市町大字古庄出土品」『奈良県史記念天然記念物調査会報』第1輯
末永哲哉 1950 「大和の古墳」近畿日本鉄道株式会社
河上利吉 1974 「石上古墳群」『奈良県の主要古墳』総理保全と古墳保護に関する調査報告書 2 奈良県教育委員会

島森義 (編) 1975 「石上・唐田古墳群」『奈良県文化財調査報告書』第20集
泉景太・元村・河原 (編) 1976 「石上・唐田古墳群」『奈良文化財調査報告書』第27集
岡川功也 1977 「春日山古墳群の築造時期」『外洋山古墳古跡』奈良県史記念天然記念物調査報告第34集
上原信也 1979 「春日山古墳群の築造時期」『外洋山古墳古跡』奈良県史記念天然記念物調査報告第34集
山内邦裕 2001 「東京駅跡」『大和前古墳集録』総理文化財研究所研究成果4号
畠田義重 2003 「奈良盆地東南の古墳」『大和の古墳』第3章巻第2章 近畿日本鉄道

日野亮一 (編) 2012 「大和古墳群―陪塚の點を踏まえる」第46企画展図録 (学) 天理大学出版部
小田木志太郎 (編) 2014 「石之内古墳群の研究」『石之内古墳群研究会』
石田正樹 (編) 2016 「石之内古墳群」『西漢吉古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第10集
白石一太郎 2017 「古墳の施設構造、石室遺跡」『大和古墳近畿周辺古跡』20 大阪府立近石鳥羽博物館
日野亮一 2019 「那岐山の施設構造、石室遺跡」『奈森井先生奉書記念講演』奈森井先生奉書記念講演
石田正樹 2019 「石上・唐田古墳群の変遷」『歴史文化の「見沼」山の古文化遺産』

小堀明 2019 「那岐山の古墳の基盤構造」『那岐山古墳』一級古跡・ダン・ゾウ古墳・別所孫子古墳・別所大寺古墳・石上大寺古墳・那岐山古墳・『私の考古学』一級古跡・唐田和尊さん遺跡論文集・白石一太郎先生奉書記念講演・古墳と国家形成の視座』白石一太郎先生奉書記念講演論文集 (編) 山川真一 (監修)

池田保雄 (編) 2020 「大和古墳群における歴史的発展」『奈良古墳』第24集 由良大和古代文化研究会
石田正樹 2020 「那岐山古墳の古墳」『大和古墳群における歴史的発展』(後) 由良大和古代文化研究会
久保辰夫 2020 「布留遺跡の古墳時代集録」『大和古墳群における歴史的発展』の後巻 布留大和古墳研究会

天理市教育委員会・天理大学附属天理学習参考書 (編) 2021 「那岐山の古墳・石上・内古墳群」天理市教育委員会
太田宏志 2021 「那岐山の地形集団」『那岐山古墳群研究』総理文化財研究所研究成果第1章
天理市埋蔵文化財 2022 「これまで判明した那岐山古墳―物語りと歴史」『別所古墳資料集』

石田大輔 2023 (予定) 「別所古墳群の範囲と構成」『布留遺跡の概観』六一瀬戸

〔2〕石上・唐田古墳群の古墳群

石上古墳群

小島信也 1966 「アミダヒラ・ササガ古墳及び別所大寺古墳の調査」『奈良県文化財調査報告書』第9集
泉景太 2001 「岩屋大寺古墳」『大和の古墳後円墳集成』総理文化財研究所研究成果第4号
小堀明 2019 「那岐山の古墳の基盤構造」『那岐山古墳・ダン・ゾウ古墳・別所孫子古墳・別所大寺古墳・石上大寺古墳・那岐山古墳・『私の考古学』一級古跡・唐田和尊さん遺跡論文集』-考古学論叢第1集 ナベの会

石上古墳群

高橋史治 1918 「大和丹波府市町の古墳について」『人間学雑誌』第33巻第2号
伊達勝也 1976 「カワナリ(奈良古墳)」『石上・唐田古墳群』(学) 天理市埋蔵文化財調査報告書第27集
泉景太 2001 「石上古墳古墳」『大和古墳後円墳集成』総理文化財研究所研究成果第4号
小堀明 2019 「那岐山の古墳の基盤構造」『那岐山古墳・ダン・ゾウ古墳・別所孫子古墳・別所大寺古墳・石上大寺古墳・那岐山古墳・『私の考古学』一級古跡・唐田和尊さん遺跡論文集』-考古学論叢第1集 ナベの会

ウツラ古墳群

高橋史治 1918 「大和丹波府市町の古墳について」『人間学雑誌』第33巻第2号
伊達勝也 1976 「カワナリ(奈良古墳)」『石上・唐田古墳群』(学) 天理市埋蔵文化財調査報告書第27集
泉景太 2001 「石上古墳古墳」『大和古墳後円墳集成』総理文化財研究所研究成果第4号
小堀明 2019 「那岐山の古墳の基盤構造」『那岐山古墳・ダン・ゾウ古墳・別所孫子古墳・別所大寺古墳・石上大寺古墳・那岐山古墳・『私の考古学』一級古跡・唐田和尊さん遺跡論文集』-考古学論叢第1集 ナベの会

ハミ古墳

土橋義之 2003 「ハミ等古墳」『奈良県文化財調査報告書』第12集
青木利行 2006 「ハミ古墳」『天理市埋蔵文化財調査報告書』平成 10~12 年度
高橋真美 2016 「天理市ハミ等古墳から出土されたシエン肥能症について」『考古学論叢』39 奈良県立橿原考古学研究所

北口洋人 2017 「天理市ハミ等古墳調査」『天理市文化財年報』平成 27 年度

玉井知介 2022 「天理市ハミ等古墳の傾倒復元と楔式石室について」『大和古墳立近石鳥羽博物館』25 大阪府立近石鳥羽博物館

豊田トンド山古墳

石田大輔 2023 「豊田トンド山古墳・唐田トンド山古墳」天理市埋蔵文化財調査報告第12集

〔3〕石上・唐田古墳群の古墳群

アミダヒラ古墳

小島信也 1966 「アミダヒラ・ササガ古墳及び別所大寺古墳の調査」『奈良県文化財調査報告書』第9集
岡川功也 1979 「奈良県東部の古墳調査」『奈良県文化財調査報告書』第190号 奈良県立橿原考古学研究所

ホリノヲ古墳

高橋史治 1918 「石上・唐田古墳群」『奈良県文化財調査報告書』第27集
泉景太・河上邦彦 (編) 1976 「石上・唐田古墳群」『奈良県文化財調査報告書』第27集
石上古墳群

石上・唐田古墳群

泉景太 (編) 1975 「石上・唐田古墳群」『奈良県文化財調査報告書』第20集
岡川功也 1979 「奈良県東部の古墳調査」『奈良県文化財調査報告書』第190号 奈良県立橿原考古学研究所

タキシラ古墳

高橋史治 1918 「石上・唐田古墳群」『奈良県文化財調査報告書』第20集
泉景太・河上邦彦 (編) 1976 「石上・唐田古墳群」『奈良県文化財調査報告書』第27集
石上古墳群

ツクリヤ尾古墳

泉景太 (編) 1975 「石上・唐田古墳群」『奈良県文化財調査報告書』第27集
泉景太・河上邦彦 (編) 1976 「石上・唐田古墳群」『奈良県文化財調査報告書』第27集

小島信也 1966 「石上・阿刀・尾の古墳群」『奈良県史記念天然記念物調査会報』第13号

泉景太 (編) 1998 「石上・唐田古墳群・尾の古墳」『天理市埋蔵文化財調査報告書』第6集 京都市立石上・唐田・226号墳 (大和古墳立近石鳥羽) 総理文化財研究所研究成果第4冊

坪井古墳群

田中俊之 (編) 1978 「石井古墳群」『科学実験費助成研究会東日本会議』天理大学芸術博物館研究会

千早古墳群

泉景太 (編) 1997 「千早山遺跡」(第2次)・平尾山2号墳:『天理市埋蔵文化財調査報告書』昭和 61~62 年度

泉景太 1999 「千早山遺跡調査報告書」考古学調査研修会中間報告 5 埼玉県文化財天理教調査会

泉景太 1996 「千早山1号墳」(第2回)・平尾山:『天理市埋蔵文化財調査報告書』平成 6~7 年度

西ノ坂古墳

堺田義之 (編) 1984 「西ノ坂古墳」『奈良県文化財調査報告書』号外 No.3 埼玉県文化財天理教調査会

竹谷坂古墳

泉景太 (編) 1988 「竹谷坂古墳」『奈良県文化財天理教調査会報告書』—告生時代後期の高地性集落—考古学調査研

宍中曾古墳

泉景太 1991 「宍中曾古墳・布留遺跡調査」(三田庄) 地区の発掘調査 20 年:埼玉県文化財天理教調査会

豊田古墳群

石田大輔 2017 「豊田古墳群」『大和の古墳』3 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

石田大輔 2021 「平成 27 年度市計画道路別丹波丹波市事業に伴う調査」『天理市埋蔵文化財調査規程』平成 27~29 年度

守谷古墳

泉景太 2017 「守谷古墳」『石上・唐田古墳群』『奈良県文化財調査報告書』第27集

十三塚古墳群

前田英二郎 1914 「十三塚古墳群」『奈良県の主要古墳』総理保存と古墳保護に関する調査報告书 2 奈良県教育委員会

〔4〕石井古墳群

守山古墳

泉景太 1999 「守山古墳」『天理市埋蔵文化財調査報告書』平成 2~3 年度

泉景太 2001 「守山古墳」『大和古墳丹波集成』総理考古学研究所研究成果第4冊

小堀明 2019 「守山古墳の基盤の構造」『那岐山古墳・ダン・ゾウ古墳・別所孫子古墳・別所大寺古墳・石上大寺古墳・那岐山古墳・』『和の考古学』-那岐山導入・追加論文編- 1 考古学論叢第1集 ナベの会

石田大輔 2020 「予想」『和の考古学』の範囲と構成、『布留遺跡の範囲』六一瀬戸

ダンゴ古墳

野野原直 1893 「大和古墳古墳調査」(新田山古墳)、『大和古文化研究会』昭和 2 年度

石田正樹 2017 「大和古墳古墳」(第3回)『天理市埋蔵文化財調査報告書』平成 10~11 年度

青木利行 2006 「ダンゴ古墳」(第2回)『天理市埋蔵文化財調査報告書』平成 10~11~12 年度

小堀明 2019 「守山古墳の基盤の構造」『那岐山古墳・ダン・ゾウ古墳・別所孫子古墳・別所大寺古墳・石上大寺古墳・那岐山古墳・』『和の考古学』-那岐山導入・追加論文編- 1 考古学論叢第1集 ナベの会

石田大輔 2020 「予想」『和の考古学』の範囲と構成、『布留遺跡の範囲』六一瀬戸

別所古墳群

梅原未祐 1918 「大和丹波府市町の古墳について」『人間学雑誌』第33巻第2号

上野耕一郎 1977 「研究用調査2 叢子古墳」『科学実験費助成研究会報告書』天理大学芸術博物館研究室

山内邦裕 1992 「十三塚古墳の測量調査」『奈良古墳・西漢吉古墳・孫子古墳調査報告書』天理大学歴史研究室 実地調査研究会報告

泉景太 2001 「守山古墳・唐田古墳」『大和古墳丹波集成』総理考古学研究所研究成果第4冊

小堀明 2019 「守山古墳の基盤の構造」『那岐山古墳・ダン・ゾウ古墳・別所孫子古墳・別所大寺古墳・石上大寺古墳・那岐山古墳・』『和の考古学』-那岐山導入・追加論文編- 1 考古学論叢第1集 ナベの会

泉景太 2021 「世の遺跡の発見からみた『部民制』」『部民の研究』平成 20~22 年度科学研究費助成事業(基盤研究)、研究促進研究会

石田大輔 2023 (予定) 「和の考古学」の範囲と構成、『布留遺跡の範囲』六一瀬戸

鶴林古墳

泉景太 1893 「大和古墳古墳調査」(新田山古墳)、『大和古文化研究会』昭和 1 年度

石田正樹 2018 「大和丹波府立近石の古墳」『人間学誌』第33巻第2号

河上邦彦 1971 「別所大寺古墳」『奈良古墳・大和古墳丹波集成』総理考古学研究所研究成果第4冊

白石太郎 2001 「別所大寺古墳」『大和古墳丹波集成』(後) 『和の考古学』-那岐山導入・追加論文編- 20 阿波の会

小堀明 2019 「那岐山古墳の基盤の構造」『那岐山古墳・ダン・ゾウ古墳・別所孫子古墳・別所大寺古墳・石上大寺古墳・那岐山古墳・』『和の考古学』-那岐山導入・追加論文編- 1 考古学論叢第1集 ナベの会

石田大輔 2020 「予想」『和の考古学』の範囲と構成、『布留遺跡の範囲』六一瀬戸

古墳由来とされる遺跡

豊原古墳

堺田義之 1983 「大和古墳古墳調査」(新田山古墳)、『大和古文化研究会』昭和 1 年度

泉景太 2018 「大和丹波府立近石の古墳」『人間学誌』第33巻第2号

前田英二郎 1971 「別所大寺古墳」『奈良古墳・大和古墳丹波集成』総理考古学研究所研究成果第4冊

白石太郎 2001 「別所大寺古墳」『大和古墳丹波集成』(後) 『和の考古学』-那岐山導入・追加論文編- 20 阿波の会

小堀明 2019 「那岐山古墳の基盤の構造」『那岐山古墳・ダン・ゾウ古墳・別所孫子古墳・別所大寺古墳・石上大寺古墳・那岐山古墳・』『和の考古学』-那岐山導入・追加論文編- 1 考古学論叢第1集 ナベの会

石田大輔 2020 「予想」『和の考古学』の範囲と構成、『布留遺跡の範囲』六一瀬戸

古墳由来とされる遺跡

豊原古墳

藤原英二郎 (編) 2011 「古代日本の壁」天理ギャラリー第144回展

草薙城跡

田辺三郎 1981 「草薙城跡」角川書店

若崎義洋 2002 「『草薙城跡』にみる奈良盆地古墳地帯と西都・地域との関係について」吉野川流域の古墳文化

泉景太先生奉書記念講演会

令和 5（2023）年 1月 7 日発行

**物部氏の古墳
石上・豊田古墳群と別所古墳群**

編集 天理市教育委員会
天理市川原城町 605

発行 天理市教育委員会

印刷 富光株式会社
天理市樺本町 2272-2

ISONOKAMI-TOYODA Tumulus Group & BESSHō Tumulus Group
: Mononobe Clan's Tombs



2023

Tenri City Board of Education